CIRAS Discussion Paper No. 112

アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究（III）
──地域社会の経済・文化資源として──

岡田雅志[1)]・柳澤雅之[2)] 編

1）防衛大学校人間文化学科
2）京都大学東南アジア地域研究研究所

京都大学東南アジア地域研究研究所

目　次

刊行にあたって　3

第１章
鈴鹿山脈南麓の環境史と「くすり」の産地の近現代
──甲賀の薬業の誕生と地域活動の展開から　石橋 弘之　5

第２章
17 世紀のカンボジアにおける交易勢力と交易品　遠藤 正之　23

第３章
薩摩博物学年表統合版　岡田 雅志　33

CIRAS Discussion Paper No.112
OKADA Masashi and YANAGISAWA Masayuki (eds.)
Interdisciplinary Study on the History of the Production, Distribution, and Use of Herbal Resources in Asia (III): Creation of An Economic and Cultural Value

©Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
46 Shimoadachi-cho, Yoshida Sakyo-ku, Kyoto-shi,
Kyoto 606-8501, Japan
TEL: +81-75-753-7302
FAX: +81-75-753-9602
March, 2022

刊行にあたって

本書は、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」による採択課題「アジアにおける薬用植物資源の生産・流通と情報・表象：資源知形成の比較・関係史」（代表：岡田雅志、2021 年度）の成果報告である。本研究課題は、同拠点事業の 2019 度採択課題「アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究：モノから見るグローカルヒストリー」、2020 年度採択課題「アジアにおける薬用植物資源の広域市場流通と地域社会の資源利用の歴史的相関に関する研究」に続き、アジアの薬用植物資源がいかに生産・流通・利用されてきたかについて、学際的な研究を行い地域社会と広域世界との連関を解明することを目的としたものである。

ここでいう薬用植物資源というのはいわゆる漢方薬で処方される生薬原料である（生薬自体は動物・鉱物由来など多岐にわたるが植物由来のものが大宗を占める）。自然由来の生薬は、その賦存が自然環境に規定されると同時に、消費サイドも、気候変動などの環境変化に大きく左右される。さらに、漢方薬のように、特定の医療知識体系に基づいて利用され、流通する。したがって、薬用植物資源に着目することによって、関係する地域間に横たわる社会、文化、経済の諸側面や自然環境の変容など様々な要素が見えてくるのである。

2021 年度の研究においては、資源の生産・利用に関する様式・知識と、資源及びそれを生み出す自然に対する認識・価値観を総合した「資源知」をキーワードとして、薬用植物資源を通じた地域間関係及び比較の視点から研究を進めた。感染症対策として、下記の通り計 4 回の研究会をオンラインで開催し、学際的議論を深めることができた。

第 1 回研究会　2021 年 7 月 30 日

第一部　薬用植物関連の研究成果

「朝鮮人参」（辻大和）、「当帰・萱草」（柳澤雅之）

第二部　情報共有

「諸国産物帳索引データベース」、「薩摩藩薬用植物園訪問報告」（共に柳澤雅之）

第 2 回研究会　2021 年 9 月 16 日

報告 1： 岡田雅志（防衛大学校）「近世ベトナムにおける薬用植物の資源知形成：東アジアの交流と比較の視点から考える」

報告 2 ：小田なら（東京外国語大学）「ベトナムにおける薬用植物の情報化：シナモンの事例」

第 3 回研究会　2022 年 1 月 15 日

報告：石橋弘之（早稲田大学）「くすりの産地の環境史～鈴鹿山脈南麓、甲賀の近現代から」

コメント：阿部大地（佐賀県立博物館・美術館）

第 4 回研究会　2022 年 2 月 7 日

報告 1：遠藤正之（立教大学）「17 世紀のカンボジアにおける交易産品と交易勢力」

報告２：岡田雅志（防衛大学校）「紀行文に見る近世日本の植物資源認識と薬用植物：『日本漢詩紀行篇』を手がかりに」

第３回研究会では、共同研究ユニットメンバーである報告者の石橋氏の発案で、甲賀で里山再生に関わる活動を行っている中島教芳氏、市川ゆきひろ氏、滋賀県立大学の高橋卓也氏にも参加いただき議論を行うことができた。また、2022 年３月３日～６日に鹿児島県で現地調査を実施し、鹿児島県歴史・美術センター黎明館、鹿児島県立図書館における文献調査のほか、薬用植物の普及活動を行っている薬草の杜（鹿児島県伊佐市）で訪問調査を実施した。こうした活動を通じて、今後、地域社会の取り組みとの協働により、現代における資源知再生に共同研究の成果を活かしてゆく可能性を見出すことができた。

上記の第3、４回研究会の報告内容を中心にまとめられた本書は、薬用植物が地域社会の歴史の中で経済・文化資源としてどのように利用され、価値形成が行われてきたかを考察したものである。第１章（石橋）は、近代化過程における甲賀の薬業の展開に注目し、自然環境、在来の宗教文化（山伏）、近代における交通網の整備、製剤技術の発展などが絡み合って地域の製薬、売薬業が勃興したことを示すと同時に、現代の地域活動に薬の歴史文化がどのように生かされていかるかを考察する。続く、第２章（遠藤）は、カルダモンなどの薬用植物資源を産するカンボジアについて、17 世紀における交易品と交易勢力をオランダ語史料に基づき整理、考察したものである。薬用植物資源をめぐって市場間競争が激しくなる 18 世紀以前において薬用植物が主要な交易品として認識されていなかったことが興味深い。第３章（岡田）は、複数存在する薩摩地域の博物学年表の統合を行ったものである。日本列島と他のアジア地域を結ぶ窓口のひとつとして、近世以降、様々な薬用植物が往来、定着した薩摩では、独自の本草学・博物学が発展し、一部にはそうした知的伝統を継承したこともあって地域の自然史・博物学の研究成果が豊富である。博物学年表の統合により薩摩における生物資源とそれをめぐる知の歴史を通覧することが可能となっている。

本書のディスカッションペーパーとしての性格上、執筆者の間で用語法や見解に相違があっても統一はしていない。また、本書は、科学研究費補助金（若手研究、課題番号 19K13366）研究課題名「近世から現代までの東南アジア山地民の移動が国家にもたらした影響に関する研究」の助成を受けた研究成果の一部でもあることを申し添える。

最後に、上記研究会で貴重な報告を行い、また議論によって研究を大きく前に進めてくれた共同研究ユニットメンバー、鹿児島調査でお世話になった多くの方々、コロナ禍の中で共同研究を力強くサポートしてくださった東南アジア地域研究研究所 CIRAS センター事務局の皆様に心よりの感謝を申し上げたい。

2022 年３月

岡田雅志・柳澤雅之

第１章

鈴鹿山脈南麓の環境史と「くすり」の産地の近現代

――甲賀の薬業の誕生と地域活動の展開から

石橋弘之
早稲田大学人間科学学術院

1.　はじめに――鈴鹿山脈と近江のくにの「くすり」の歴史

「くすり」という言葉はどこからきたのか。その語源には諸説あるなかで、「奇異なる力」を意味する「クス」「クシ」という語にその由来をみいだす説がある[1)]。「奇異」であり、「霊妙」でもある、「不可思議」な力のあらわれを「くすり」という言葉に見出したものだ（杣庄編 1975: 8–9）。

「草」を「クサ」と呼び、その音が「クシ」とも似ていることは、偶然かもしれないが、あるいは、「奇し」という言葉とも何らかの深い関係があるのかもしれない（杣庄編 1975: 9）。いずれにしても、植物が生まれ育つことを不思議な現象と受けとめ、蔓などを身体にからませてその生命力を身につけ、さらに服用して体内にその生命力をとりこもうとする、その過程で、草根木皮を生薬とするようになったことが想像される（杣庄編 1975: 9）。

日本列島のなかで鈴鹿山脈とその周辺は「くすり」の歴史とかかわる地域が点在する。富山や奈良、そして滋賀県の甲賀や日野は後に述べる「おきぐすり」として知られる配置売薬がおこり展開した。

そのなかで、滋賀県は、近江と呼ばれていた頃から、薬草の記録が残る。たとえば、万葉集には、天智天皇（在位 668 ～ 672）が「遊猟（みかり）」をした時に詠まれた歌が収められていることを『滋賀の薬業史』は紹介している（杣庄編 1975: 15）。

1）「くすり」という語に関して国語学者、大島正健氏は「国語の語源とその分類」の中で、「奇異なる力を意味するクス・クシ（奇し）の活用語（動詞）クスルが名詞化したもの」とした（杣庄編 1975: 8–9）。大島正健（1859 ～ 1938）は、漢字音の研究で知られており、中国漢字音、日本漢字音にかんする著書が多数ある（「大島正健」，日本大百科全書（ニッポニカ），JapanKnowledge）。

○天皇、蒲生野に遊獵の時、額田王の作れる歌

あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

○皇太子の答へまししし御歌

紫のにほへる妹を憎くあらば人嬬ゆゑに我恋ひめやも

額田王が詠んだ歌に、天智天皇の弟にあたる大海人皇子が歌で答えた贈答歌である。この歌にそえられた注釈から、668年5月5日、琵琶湖の東にある平野、蒲生野で薬猟（くすりがり）をした時に詠まれたものであることを知ることができ、「これは滋賀県の最古の薬に関する記録」ともいわれている（杣庄編 1975: 15）。

薬猟とは、もともと大陸から伝えられた行事であり、古代の日本では陰暦五月五日にシカの若角や薬草を採る宮廷行事であった[2)]。日本書紀のなかで、推古19年5月5日（611年6月20日）、現在の奈良県にある宇田野で行われた薬猟が日本で最初の記録とされている[3)]。

近江からは平安時代に薬草を貢納した記録もある。延喜式（927年）には、全国各地から生薬を朝廷に貢納したこと、そこには、それぞれの国が貢納した生薬の種類と量が記されており、「いずれの国からも数種類、少ないものでも一種について五十斤、多いものは一石にも及ぶ量」であった（杣庄編 1975: 19–20）。そのなかで、「近江国からは七十三種が採取されて進貢されておりこれは種類に関していえば、全国第一位を占め」ていた（杣庄編 1975: 19）。

近世から現代にかけて、滋賀県は商売としての薬業が盛んな地域としても知られてきた。江戸時代に日野の売薬から製造販売がはじまった「萬病感應丸」をはじめ、明治期以降の甲賀では現代の製薬企業の源流となる会社がいくつも起こされた（c.f. 進藤 1992）。厚生労働省の薬事工業生産動態統計年報は、令和元年の滋賀県の医薬品の生産金額は、5,449億円、全国シェアは5.7％、全国順位は第5位、としている[4)]。加えて、滋賀県内の地場産業のなかで、甲賀や日野を中心とする製薬企業は令和元年の生産金額は656億円であり、県内の9つの地場産業のなかで第一位にある[5)]。

以下、本稿では、滋賀県のなかでも甲賀の薬業は、どのようにしてはじまり、

2）「中国では《楚歳時記》によると、6世紀中葉ころ、揚子江中流域で、5月5日の端午の節句（夏至に近い）に、毒気を避けるため、香りの高いショウブやヨモギ、種々の薬草を摘む習俗があった。日本古代の薬猟は、百済を経由して伝えられたこの古代中国の民間習俗と、高句麗の宮廷で3月3日に行われていた鹿狩りの風習が併せて取り入れられ、推古朝に宮廷行事として成立したらしい」といわれる（「薬猟」，世界大百科事典，JapanKnowledge）。

3）日本書紀〔720〕推古一九年五月（寛文版訓）「十九年の夏五月の五日に、菟田の野に薬猟（クスリカリ）す。鶏鳴時を取りて、藤原池の上（ほとり）に集ひ」（「くすり‐がり【薬猟・薬狩】」，日本国語大辞典，JapanKnowledge）。

4）「滋賀県の製薬業界」滋賀県ホームページ（shiga.lg.jp）（https://www.pref.shiga.lg.jp/yakugyo/gyoukai/306423.html）2022年2月2日閲覧。

展開してきたのかを、鈴鹿山脈の環境と甲賀の近現代の歴史、そして現在の地域活動からみていきたい。

2.　鈴鹿山脈南麓、甲賀の地域概要

鈴鹿山脈の南麓に位置する滋賀県甲賀市は、琵琶湖にそそぐ最大の河川である野洲川とその支流が通る水の径の上流域にあり、川の谷筋に丘陵地が広がる（図1、写真1）。野洲川の支流、杣川をさかのぼると油日岳へ、杣川の支流、大原川をさかのぼると那須ヶ原山へ、いずれも鈴鹿山脈の南麓と接する山へとたどりつく（石橋・石田・高橋 2020）。

甲賀市の南東、大原川が丘陵地を開く地形は大原谷と呼ばれており、その谷筋に集落が点在してきた。明治期の町村制の施行時には大原村、油日村、佐山村の3村ができる。戦後にこの3村を合併して甲賀町となった。2004年には甲賀町、甲南町、土山町、水口町、信楽町を合併して甲賀市が設立された（甲賀市史編さん委員会編 2016; 石橋・石田・高橋 2020）。

大原谷の西方にも信楽高原へと続く山々が連なっている。そのなかで、甲賀市のほぼ中央にある飯道山（はんどうさん）は、もともと穀物と水の神として信仰され、その後の神仏習合の浸透とともに、修験道の霊山として知られるようになった（石丸 2005）。飯道山とその周辺には山伏とゆかりのある場が各地にあり、後に述べるように、甲賀の薬業の起こりとも深くかかわる。

鈴鹿山脈南麓に広がる丘陵地は交通の要所としての歴史もある。滋賀県と三重県の県境にある鈴鹿峠は、「伊勢と京都を結ぶ東海道の交通の要地」ともいわれてきた。そのなかで、甲賀の丘陵地は鈴鹿山脈にたいして、なだらかに連なることから、「交通路の設定が比較的容易」[6] である。このことが東と西を結ぶルートが複数あるなかで、鈴鹿越えのルートが主流とされるようになった背景にあるといわれる（甲賀市史編さん委員会編 2007: 13–14）。このような甲賀の立地は、後にみる売薬行商を担った人びとが各地を行き来する下地にもなったと思われる。

野洲川の上流域にある甲賀市は琵琶湖の水源をなす森林が広がっており、甲賀ヒノキの産地としても知られてきた（石橋・石田・高橋 2020）。2018年の市の森林面積は6割をこえ、そのうち9割は民有林で占められており、民有林の約5割はスギ、ヒノキの人工林である（滋賀県・甲賀市 2018）。これらの人工林には、幕末以降、薪や薪炭の需要が高まり甲賀郡の山が皆伐された後に、明治初期から甲賀の人びとが世代を重ねて植林をしてきた歴史的背景がある（石橋・石田・高橋 2020）。そのため、明治以前と現在とでは地域の森林は大きく変わっていることに注意が必要である。

5）脚注4）におなじ。

6）「すずかこくていこうえん【鈴鹿国定公園】滋賀県・三重県」，新版 角川日本地名大辞典，JapanKnowledge。

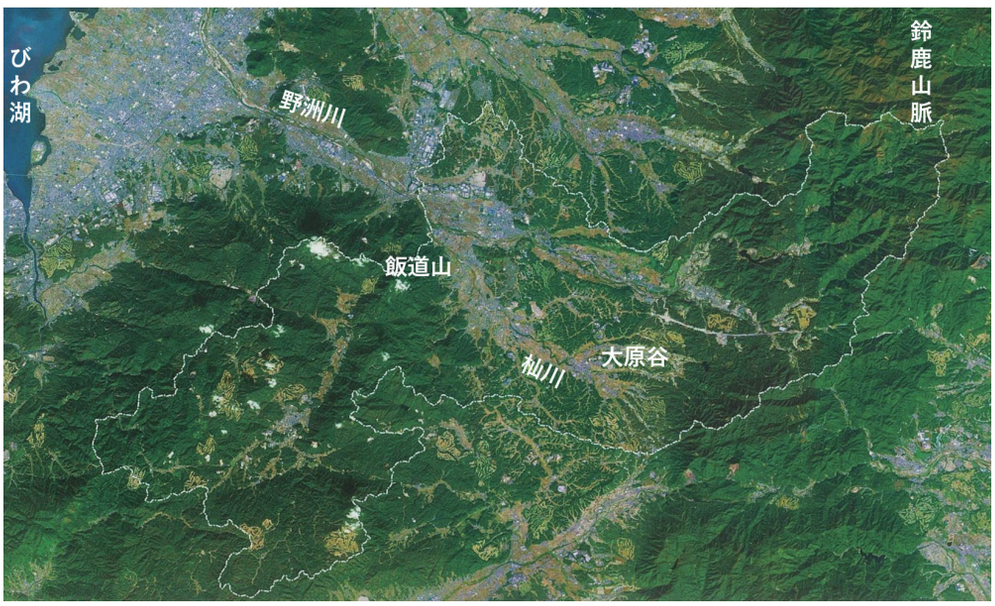


図１　人工衛星からみた甲賀市とその周辺
出所）『甲賀市史第１巻 古代の甲賀』口絵。地名は筆者による加筆。

写真１　甲賀の丘陵地と鈴鹿山脈の遠景（2019 年 10 月 27 日筆者撮影）
飯道山に隣接する庚申山から甲賀市を見渡す。写真手前は丘陵、その向こうに大原谷が広がり、その奥に鈴鹿山脈が連なる。

3.　甲賀の薬業のはじまり

ここからは甲賀の薬業は、どのようにはじまったのかを、鈴鹿山脈の地理と植生、古琵琶湖層の土壌と農業の条件、明治以前からの薬の知恵の蓄積、そして明治以降の宗教近代化政策への山伏の対応、という側面からみていきたい。

3.1. 鈴鹿山脈の地理と植生

鈴鹿山脈は日本海側から太平洋側にかけて南北に山脈が連なることから、その地理と植生の特徴に関心がむけられてきた（福岡 1965）。本州をタテに縦断する鈴鹿山脈は、伊勢平野と近江平野、伊勢湾水系と琵琶湖水系を東西に分け

ており、本州のほぼ中央に位置するその立地から北方系と南方系の動植物が混在することが知られてきた[7]（図 2）。

鈴鹿山脈にみられる動植物の分布の特徴は、その北から南にかけての立地によって異なる気候と地質の環境条件から説明できる[8]。すなわち、鈴鹿国定公園の北部は日本海側の気候から影響を受けるのに対して、その南部は太平洋側の気候から影響を受ける。そして、鈴鹿国定公園の北部は石灰岩地帯をなすのに対して、南部は花崗岩地帯をなす。このように東日本と西日本を分かつ立地にあることから、動植物が多様になっているといわれる。

この環境条件に照らすと、鈴鹿山脈南麓にある甲賀は、太平洋側の気候から影響を受け、花崗岩地帯と重なる立地にあることがわかる。

図 2　日本列島のなかの鈴鹿山脈の位置

3.2. 古琵琶湖層の土壌と農業の条件

琵琶湖は移動する。いまの琵琶湖のもとになる地層の堆積は、およそ 430 年万年前、伊賀盆地からはじまり、そこから西北に移動して、現在の湖の姿となった（甲賀市史編さん委員会編 2007: 13, 40）。その痕跡は、古琵琶湖層群と呼

7）「鈴鹿国定公園」，日本大百科全書（ニッポニカ），JapanKnowledge。
8）「みんなの奥永源寺」（http://okueigenji.co.jp/know4.shtml）2022 年 2 月 10 日閲覧。

ばれる地層にみることができる。古琵琶湖層群とは「大昔の湖沼やそこへ流れ込んだ河川の堆積物でできた地層」のことであり、近江盆地から伊賀盆地にかけての丘陵に広がる（甲賀市史編さん委員会編 2007: 40）。野洲川上流では、古琵琶湖層群が谷沿いに丘陵群を構成しており、小河川で深く開析が進んだところは、農地や集落の立地と重なる（甲賀市史編さん委員会編 2007: 13）。

とりわけ甲賀町から甲南町にかけての丘陵は、「厚い粘土層が砂層を挟んで重なって」おり、その堆積は「この地域に安定した深い湖が長く続いたことを語っている」（甲賀市史編さん委員会編 2007: 41）。

甲賀町のなかで薬業は大原と油日で主に発展した（杣庄編 1975: 78; 神郷土史編集委員会編 1999: 443）。その背景として、大原と油日はともに、耕地面積が限られていること。水田が重粘土質[9]のため、冬の田んぼに水をはる一毛作が多く、「春秋の農繁期を除いて余剰労働力が比較的豊かであったこと」が指摘されている（神郷土史編集委員会編 1999: 443）（写真 2）。この後で述べる配置売薬も農閑期を利用して行われるようになった（油日創意と工夫の郷づくり委員会 1998: 399）。

以上のような古琵琶湖層群を地盤とする農業の条件は、その他の産業が発展する余地をつくり、そのなかで薬業が起こったことを自然環境の側面から示唆する。

3.3. 明治以前の山伏たちの薬の知見

甲賀で商売としての薬業がおこるのは明治以降である。しかし、それ以前から薬の知恵は蓄積されてきた。その担い手となったのは山伏の人びとであった。甲賀の山伏には、飯道山で修行する「山上の山伏」とともに、山麓の村に居住

写真 2　古琵琶湖層群の粘土（2019 年 10 月 19 日筆者撮影）

9）古琵琶湖層は、火山灰と粘土の混じった凝灰質泥岩からなり、地元の人のあいだで「ヌリ」「ズニンコ」などと呼ばれる。青色を帯びた粘土が混じったものはカリウムを含んでおり、田んぼの客土にも利用された。いっぽうで、重粘土層の地質は、日照りにあうと田んぼの表面や畔に深く亀裂が入り干害を起こしやすく、復旧に大きな労力が費やされた（大原貯水池土地改良区 2003: 2）。

する「里山伏」と呼ばれる人たちがいた（甲賀市史編さん委員会 2014: 410; 甲賀市史編さん委員会 2015: 195）。

甲賀の里山伏は、「飯道山周辺の村々に居住し、さまざまな世俗的活動を通じて庶民と深くかかわった」（甲賀市史編さん委員会 2014: 410）。その特徴の一つとして、「村落に定着し、庶民に対して配札や勧進（かんじん）、卜占（ぼくせん）や祈祷、医療などさまざまな願いに応じるための社会的活動、すなわち里修験としての活動が顕著にみられた」（甲賀市史編さん委員会 2014: 414）。そして、山岳修行を行ういっぽうで、「各地の社寺の本願書に所属して、社寺造営のための勧進や配札業に携わっていた」（甲賀市史編さん委員会 2014: 414）。

甲賀の山伏は加持祈祷先での土産物として薬も配っていたことから、薬僧とも呼ばれており、このことは甲賀の薬業の起源の一つにも位置づけられている（神郷土史編集委員会編 1999: 441–443）[10]。

甲賀の薬僧は朝熊（あさま）坊と呼ばれたグループと、多賀坊と呼ばれたグループがあった（神郷土史編集委員会編 1999: 443; 進藤 1992: 56–57）。一方の朝熊坊とは、伊勢国朝熊嶽明宝院に所属し、朝熊信仰を全国に広めた山伏である。朝熊坊は、甲南町の竜法師を拠点としており、祈祷のさいに「万金丹」という薬を携行し、望月家が指導的な立場にあった（進藤 1992: 56–57）。他方の多賀坊は、多賀大社の不動院に所属した。多賀坊は甲南町の磯尾を本拠としており、御札を巡回配布したさいに「神教はらぐすり」という薬を土産物として持参し、木村家が指導的な立場にあった（進藤 1992: 56–57）。

3.4. 明治以降の宗教近代化政策への山伏の対応

明治政府による宗教の近代化をはじめとする政策は、それに対応した甲賀の山伏たちが薬業を創業するきっかけとなった。その発端は、江戸時代まで仏教を基礎においた政策から、神道を軸とする政策へと転換した明治政府が、明治元（1868）年に神仏分離令をだすことで、神社から仏教色を排除し、寺院内の小社を独立、分離させたことにはじまる（甲賀市史編さん委員会 2015: 185）。明治 5（1872）年 9 月には、明治政府が「修験宗」を廃止、明治 17（1884）年には配札禁止令が出された（甲賀市史編さん委員会 2015: 195; 神郷土史編集委員会編 1999; 442）。

神仏分離令の影響は、甲賀の飯道山を拠点とした「山上の山伏」にも及び、明治 4（1871）年頃には「山上の飯道寺が廃寺となり、その時に寺僧はほとんど下山したといわれる」。

明治政府による修験宗の廃止と配札禁止令は、甲賀の山麓に居住した里山伏にも影響を及ぼした。江戸時代まで山伏たちは得意先としてきた各地の旦那場で祈祷と配札を行い、その見返りとして米や銭を受け取っていたが、「配札によって寄進を受ける」ことはできなくなった（甲賀市

10）この他に甲賀武士を薬業の担い手の起源に位置づける説もある（神郷土史編集委員会編 1999: 441–443）。これについては、後述する。

史編さん委員会 2015: 195; 神郷土史編集委員会編 1999: 442)。

さらに、明治政府による医療の近代化政策は、それまで山伏たちが秘伝としてきた製薬を制限もした[11)]。明治 3（1872）年の売薬取締規則は、「神仏の名を語り、家伝秘宝などと称して売薬をすることを禁じた」からである（甲賀市史編さん委員会 2014: 429)。

こうした明治政府の政策にたいして、山伏たちは、これまで配札の傍ら行なっていた薬の製造と販売にとりくむとともに、それまでの配札先としてきた旦那場（得意先）を薬の配置先へとすることで、売薬業を生計の一つとするようになった（甲賀市史編さん委員会 2015: 195; 神郷土史編集委員会編 1999: 442）[12)]。

ここにみる山伏の対応は甲賀の配置売薬が誕生する契機となった。その特徴は「甲賀の売薬は、得意先に薬を預け置き、次回の訪問時に使用した薬の代金を集金する配置売薬で、信仰をなかだちとした信頼関係がその底辺にあった」こと、「地場産業として発展した「甲賀のくすり」は、甲賀の山伏たちがその礎を築いた」ことにある（甲賀市史編さん委員会 2014: 430)。

明治初期の甲賀郡の売薬行商が修験者による配札の面影を残していたことは、古老への聞き取りをもとに当時の様子をまとめた次の記述にもみることができる（杣庄編 1975: 74)。

> 旅（行商）には羽織はかまの正装で、供人を従えて出かけたという。旅先では戸長の家などに先ず立ち寄り、大祓や般若心経をあげるのが普通であった。そうした所に村人を集めて祈祷をし、村人が持ち寄った薬の袋に持参した薬をつめたりすることもあったという。医療にめぐまれない土地の人たちは、売薬行商人を単なる商人として見ていたのではなかった。その訪れを待ち望んで、ほんとうに有難がっていたという。旅先では、生まれた子供の名付け親になったり、八掛を見たりするといったことも多かったようである。明治 17 年の配札禁止令公布以降も、なお配札を続けた家もあったというし、配札はなくなっても宗教色は容易に消えたのではな

---

11) 甲南町、下磯尾にある小山快玄家の東雲舎に残された史料のなかには、製薬法を秘伝としたことを、「一子相伝秘薬也、他見無用、必ず伝授致すべからざるもの也」と記している（甲賀市史編さん委員会 2014: 429)。小山快玄家は京都祇園社の配札を行い、医療や製薬にもかかわっていたことを記した史料が残されており、九州英彦山との間で医療のやりとりをした記録も残されているという。

12) たとえば、朝熊坊が土産物としていた万金丹が販売されるようになった次の例がある。伊勢朝熊山内の塔頭普明院に所属した小山快玄家は、同院が配札先としていた四国伊予（愛媛県）を万金丹の販売先とするようになり、明治 10 年には「「売薬行商鑑札御願」を出し、「伊勢朝熊万金丹」の名で売り出」した（甲賀市史編さん委員会 2014: 429)。

かったのである。

こうして、山伏たちは、もともとは副業としてきた薬の製造と販売を本業とするようになる。この動きがその後の甲賀の薬業へと展開していくことになる。

4.　明治初期の甲賀の売薬業の概況

明治初期、甲賀の売薬業は現地の人びと生業のなかでどのような位置づけにあったのか。

明治 13（1880）年に刊行された『滋賀県物産誌』は、滋賀県が町村の産業実態を知るためにおこなった物産調査の記録であり、明治初期の地域の産業の概要を知ることができる。『滋賀県物産誌』をもとにして、現在の甲賀市にある五町の集落を対象に、明治初期の産業動向を整理した『甲賀市史第 4 巻 明日への甲賀への歩み』によると、農業が 8 割以上を占めるいっぽうで、余業としての生業が数多くあった（甲賀市史編さん委員会 2015: 82）。

そのなかで、甲南町域と甲賀町域では売薬を、農業余業および本業とする人もいた。すなわち、甲南町域では、農業余業としていた売薬商は龍法師（現在の竜法師）におり、これを本業としていた売薬商は野尻・礒尾・新治にいた（甲賀市史編さん委員会 2015: 87）。甲賀町域では「ほとんどが農業を主にして」いるなかで、「商業関係では売薬業の萌芽が大原中と滝でみられ」た（甲賀市史編さん委員会 2015: 86）[13]。

同じく『滋賀物産誌』をもとに売薬行商にかんする記述を参照した『滋賀の薬業史』は、「江戸末期から明治初期にかけて、甲南町から甲賀町へ売薬業が拡大した」としている（杣庄編 1975: 73）。また、当時の売薬行商の範囲は広く、伊賀（三重県北西部）、山城（京都府東南部）、越前（福井県東部）などの近隣だけでなく、播磨（兵庫県南西部）、作州（岡山県北部）にまで及んでいた（杣庄編 1975: 73; 甲賀市史編さん委員会 2015: 86）。

明治期の鉄道建設も売薬行商が及ぶ地理的範囲を広げた。明治 13（1880）年に京都と大津（のちの浜大津駅）を結ぶ官営鉄道が開通した後には、「旧東海道沿いの宿場町を私営鉄道によって結ぶ計画が、京都府・滋賀県・三重県の財界人を中心に進められて」いた（甲賀市史編さん委員会 2015: 64）。この計画は草津と四日市を結ぶ関西（かんせい）鉄道として具体化され、明治 22（1889）年に草津駅から三雲駅の区間が開通、明治 23（1890）年 2 月 19 日、三雲駅から柘植駅までが開通する（甲賀市史編さん委員会 2015: 66）。いっぽうで、関西鉄道の路線沿いにあった甲賀町の油日村は、最寄り駅が遠かったことから、油日村と隣接する大原村との共同誘致によって大原駅（のちの甲賀駅）を設置し、売薬行商人の往来や木材の搬出を促した（甲賀市史編さん委員会 2015: 70–71）。甲賀郡を

13) 甲賀町域の農業余業には、製茶、養蚕、炭焼き、採薪などもふくまれた（甲賀市史編さん委員会 2015: 86）。

通過する関西鉄道の開通は「全国的にみてもかなり早い時期であり、京都、伊勢方面への交通は飛躍的に便利になった」(甲賀市史編さん委員会 2015: 66)。

5.　甲賀で薬業を起こした人物

甲賀の薬業を起こしたのはどのような人たちだったのか。現在の甲南町から甲賀町の範囲へと薬業が広がった流れをふまえつつ、明治初期に薬業を担った主な人物をみていきたい。

5.1. 売薬製造を開始した望月本実

甲賀郡で最初の売薬業は、甲南町域の望月本実が起こしたことが知られている（杣庄編 1975: 70–71)。現在は甲賀流忍者屋敷としても知られる甲賀武士の家に生まれた望月本実は、明治初年に竜法師で売薬製造業を営みはじめる。明治 10（1877）年頃には同業者が 10 数人おり、明治 24（1891）年には望月氏らが共同製剤所を設立、その 3 年後に望月合名会社を設立、さらに、配札禁止令が出された後には、明治 35 年に地元の同業者とともに近江製剤株式会社を設立した（杣庄編 1975: 70–71)。近江製剤株式会社は、「製薬機械を設置し、当時としては大規模な製薬と売薬業を営」んでいた（甲賀市史編さん委員会 2014: 430)。

5.2. 配置売薬の販路拡大と組織化をすすめた渡辺詮吾とその弟子たち

その後、売薬と製薬の方法を甲南町から甲賀町へと伝えたのが、「事業家」とも「甲賀売薬の元祖」とも紹介される渡辺詮吾[14]（図 3）であった（杣庄編 1975: 74–75; 人物誌編集委員会編 1980: 70–72)。弘化 4（1847）年 5 月 7 日、甲賀町の油日村、大字滝に渡辺茂兵衛の弟として渡辺詮吾は生まれた。幼少時は良平と呼ばれ、甲南町の寺庄にあった酒屋で丁稚奉公として働き、「その時たまたま縁故にあたる池田兵五郎氏の勧めもあって、同所池田詮吾氏のもとで配札に従事する」ようになり、一時は池田家の養子となって「詮吾を襲名」した（杣庄編 1975: 74; 人物誌編集委員会編 1980: 71)。この池田家は飯道山の岩本院による修験の家であり、「明治になって飯道山の修験が廃止せられた後も、池田村にあって岩本院を名のり、諸国に配札、加持祈祷のかたわら施薬を行っていたと伝えられる」(杣庄編 1975: 74)。

その後、渡辺詮吾は滝に戻り、慶應元（1865）年、19 歳の時に、庄屋の権右衛門の娘と結婚して婿養子なってから、岡山県美作への売薬行商をはじめる（人物誌編集委員会編 1980: 71; 杣庄編 1975: 74)。当初の行商は羽織、袴の正装で行い、荷物持ちの小僧とともに、訪れた土地の組頭や庄屋の自宅に人に来てもらい配札と売薬を現金取引でおこなっていた。その後は家々を訪れて売薬を配

14) 渡辺詮吾の姓は一般には「渡辺」と表記されるが、『甲賀人物誌』のみ「渡邉」と表記されている。本稿はより広く使われている「渡辺」の表記を用いた。

置するようになり、そのころの得意帳も残されているという（人物誌編集委員会編 1980: 71）。その後、配札禁止令と薬務行政が整備された後は、「売薬営業の鑑札を得て売薬を行う」ようになった（杣庄編 1975: 75）[15]。

岡山への行商で渡辺詮吾があつかった製剤は、「丸剤の功能円が最初」であり、「疳薬と清涼剤を併せた内容で、気付け、毒けし、その他諸病によし」とされた（人物誌編集委員会編 1980: 71）。岡山への行商は、製剤の処方を身につける機会にもなった。美作地方からの帰りに立ち寄った赤穂で煉薬「テリアカ」の配合と製法を習得した後には、近江で「最初」といわれる「テリアカ」を手掛けた（人物誌編集委員会編 1980: 71）。

渡辺詮吾のもとに弟子入りした者も多く、「最盛期には百余人に及ぶ行商人を容していた」ともいわれる（人物誌編集委員会編 1980: 71）[16]。そのなかでも、最初の弟子となった大北岩吉、藤岡繁蔵、岡本與三松（与三松）は、「三羽鳥」と呼ばれ、渡辺詮吾の「手足となって売薬の発展に協力した」人物として紹介される（人物誌編集委員会編 1980: 93）。この 3 人をはじめとする弟子たちに、渡辺詮吾は「売薬をすすめ、さらに独立営業させるなどして、甲賀町における売薬を拡大していった」（杣庄編 1975: 75）。「三羽鳥」と呼ばれた弟子たちは、その後、配置売薬の販路を各地に拡げたほか、同業者たちと提携して組合や株式会社の設立にもかかわった（人物誌編集委員会編 1980: 94–95, 100–101）。

甲賀の薬業の組織づくりにかかわった弟子たちを育てた先達でもある渡辺詮吾のとりくみは、配置売薬のみならず、「個人の営業から組合・企業としての営業へ一歩すすめた」ことが重要なとりくみであったと評価されている（杣庄編 1975: 75）。

5.3. 薬草の栽培を試みた岡本與三松

ここまで甲賀の薬業の発祥について、売薬の行商、製剤、販売にかかわった人物のとりくみからみてきた。いっぽうで、明治期以降には売薬の原料とする薬草の栽培を試みた人物もいた。それは「詮吾翁の後継者」とも「薬業基盤の立役者」とも紹介される、先にみた渡辺詮吾の弟子にあたる岡本與三松である（人物誌編集委員会編 1980: 100–102）（図 4）。

明治 4（1871）年、油日村の大字毛枚（もびら）に市郎左衛門の三男として生まれた岡本與三松は、大阪道修町の薬種問屋の小僧として働いていた（人物誌編集委員

15）明治政府は売薬取締規則や売薬印紙税法をはじめ薬事法を制度化して、薬業を取り締まりの対象とするようになった、明治政府による薬業政策とその影響、甲賀の人びとの対応は、進藤（1992）、杣中編（1975）に詳しい。

16）昭和 50 年以前の故人を対象に甲賀で活躍した人物の生い立ちと取り組みを、その人物写真とともに人物の特徴をあらわす小見出し入りで紹介した『甲賀人物誌』（人物誌編集委員会編 1980）には、渡邉詮吾とその弟子たちをはじめ、明治以降に薬業分野で活躍した個人が 20 名ほど紹介されている。それぞれの人物どうしの関係や取り組みから、甲賀の薬業にかかわった人のネットワークの形成とその広がりをみていくことは、今後の課題としたい。

図 3　渡辺詮吾（1847 ～ 1912）
出所）『甲賀人物誌』p.70

図 4　岡本與三松（1871 ～ 1949）
出所）『甲賀人物誌』p.100

会編 1980: 100）。そして、「たまたま帰郷の際に、詮吾翁に出逢う機会をえて、売薬の将来性を説かれ、また協力者として依頼された」ことが薬業の道へすすむはじまりとなった。弟子入りして数年後、岡本與三松は 18 歳で独立、それまでの配札先だけでなく、その他の地域にも進出して、三重県や東京都まで売薬を広げた。さらに、販路を拡大するのみにとどまらず、「薬品の製造許可をとり、詮吾薬房での経験を生かし「テリアカ」の調整を初め、五疳薬の製剤など着々と方剤をふやし」、「各地で開催された博覧会に出品して賞をえた」（人物誌編集委員会編 1980: 100）。

明治期中頃から大正期を経て昭和初期にかけて、岡本與三松は薬業にかかわる組合や会社をいくつも設立して、その役員をつとめた。そのなかで、大正 14（1925）年に副組合長、昭和 3（1925）年に組合長となった、甲賀郡売薬同業組合の在任中には、日野売薬同業組合と提携して、次の 4 つの計画を立て、滋賀県に陳情した（人物誌編集委員会編 1980: 101）。

第一に「県下一円の同業組合に統一すること」
第二に「山林及び荒れ地に薬草を栽培すること」
第三に「輸出を目的として海外へ視察団を派遣すること」
第四に「売薬試験場を設置すること」

この 4 つの計画のうち、3 つは実現したものの、残りの 1 つ、薬草の栽培は失敗した。薬草を栽培することで「優良生薬」を生産することはできたものの、「市価は安く、採算がとれず中止するに至った」からであった（人物誌編集委員会編 1980: 101）。

ここで、「くすりの生産」という観点から注目したいのは、岡本與三松がたてた計画のうち実現したものよりも、失敗した薬草の栽培がどのようなものであったかである。それは、より広くは、甲賀の売薬や生薬に使われた山野草の生産の実態はどうであったか、という問いにもつながる。そのためには、商用の生薬とともに、自家用の生薬、それぞれの生産についてより深く調べることが必要である。

商用の生薬については、どんな種類の植物を、どこで、どのように栽培したのか。誰の土地で栽培したのか、個人有林であったのか、区有林であったのか、入会地であったのか、どんな土地で栽培したのか、雑木林であったのか、人工林であったのか、山林ではなく草原のような場所もあったのか、などを精査していくことが求められる。ただし、明治直前までに山伏たちが薬の製剤を秘伝としてきたことをふまえると、その後の生薬の生産も商売上の秘密とされていたであろうことも気にとめておきたい。

他方の自家用の生薬については、上記の事項に加えて、山野草の知恵を人びとが次世代にどのように継承してきたのかを知ることが求められる。ただし、個々人が経験的に蓄積してきた知恵は日常的に当たり前のものとされてきたことが想像される。文書の記録からだけでなく、フィールドワークや現地の人への聞取りからも調べていくことが求められる。

明治初期に甲賀の薬業を営んだ人びとは、「自家で原料を仕入れ、売薬に製造し、自家の得意に消費していた」といわれている（杣庄編 1975: 80）。しかしながら、当時の売薬業者たちが、何を売薬の原料とし、その素材をどこから仕入れたのかは、これまでに刊行された甲賀の売薬について述べた文献から詳しいことを知ることはできなかった。商用の薬草の栽培と合わせて深く掘り下げることが課題であろう。

6.　現代の甲賀にみる薬草・薬業にかかわる地域活動

19 世紀末から 20 世紀初頭以降の甲賀の売薬や生薬の生産の実態を知ることとは、これからの課題であるが、そのいっぽうで、21 世紀の甲賀では薬草の利用や薬業の歴史を掘り起こし、将来への継承をめざすとりくみがある。

6.1. 里山イベント「甲賀忍者里山を行く」

「甲賀忍者里山を行く」は、甲賀町の大久保で里山の活動にとりくむ大久保里山再生委員会と SATOYAMA+ が主催するイベントである。里山に人の手が入ることが少なくなった現代のなかで、「里山に忍者を入れる」ことで里山に人が訪れるきっかけをつくっている[17]。最初に開催されたのが 2018 年 11 月。

17) 現代の人口減少を背景にして里山の手入れを誰が担うのかが課題になるなかで、野洲川上流域にある甲賀町で森林保全に取り組む団体は多様化しており、森林保全に新たな意味を見出すとりくみを実践している（石橋・石田・高橋 2020）。

その翌年 2019 年 10 月には 2 日間にわたり、滋賀県立大学の留学生と地元の人が一緒に里山の道を整備して歩き、どんな山野草があるのかを実地で学ぶとともに、江戸時代に建てられた役行者の像を題材に修験道の歴史を学んだ（石橋・石田・高橋 2020: 127）（写真 3）[18]。

6.2. くすり学習館

くすり学習館は、「人と薬の関わりを体験・学習」することをテーマとする甲賀市の施設である [19]。平成 22（2010）年 8 月に開設された（甲賀市史編さん委員会 2015: 595）。常設展示室には、配置売薬や滋賀の薬業にかかわる製薬道具や看板や広告など江戸時代からの資料を歴史に沿う形で展示している（図 5）。企画展室には館が所蔵する資料や特定のテーマにかんする企画展が行われており、2020 年 9 月から 2021 年 3 月にかけては開館 10 周年企画展「くすりと甲賀忍者〜その知恵と技」が開催された。健康に関心をもつ子どもや大人を対象とした体験学習のイベントも行われており、丸薬づくりや実験、健康ワークショップなどが開かれている。

写真 3　甲賀忍者里山を行く（2019 年 10 月 19-20 日、筆者撮影）
左は、里山の歩道を整備する地元の人と留学生
右上は、山の上にある役行者の像
右下は、スズメウリの果実

18)「甲賀忍者里山を行く 2019」と題したこのイベントの様子は、総合地球環境学研究所・栄養循環プロジェクトの次の Facebook 記事を参照されたい。
イベント 1 日目（https://www.facebook.com/chikyu.erec/posts/2418076731846908）
イベント 2 日目（https://www.facebook.com/chikyu.erec/posts/2418081038513144）
19) 人と薬の関わりを体験・学習｜甲賀市 くすり学習館（kusuri-gakushukan.com）。

6.3. 甲賀のくすりコンソーシアム

2021 年 12 月 20 日、くすりをいかしたまちづくりをめざして「甲賀のくすりコンソーシアム」が設立された[20]。くすりの関心を高めるために「くすり文化」の継承と情報発信を行うとともに、くすり産業を振興にむけたとりくみとしてはじまった。その担い手として、企業、自治体、行政、小中学校、高校、大学、市民団体が連携する。薬業と観光業それぞれを視野に入れて薬草園の整備や忍者や里山にかかわる活動が構想されている。

図 5　くすり学習館・常設展示室
出所）くすり学習館ホームページ「施設概要」
（http://www.kusuri-gakushukan.com/display/）2022 年 2 月 21 日閲覧

7.　おわりに

本稿では、鈴鹿山脈南麓と琵琶湖・野洲川上流域の環境をふまえながら、甲賀の薬業と薬草利用にかかわる歴史的背景と現代の地域活動を概観してきた。甲賀の薬業史は、山伏の配札から配置売薬が生まれたこと、その後の商売としての展開については、地域の郷土誌や既刊の文献にみることができるいっぽうで、その原料の入手先や薬草の栽培にかかわる生産の実態がどうであったかは断片的にしかわからないことが多い。

一つのヒントになると思われることは、江戸末期から明治初期にかけて山伏や薬業を起こした人びとが配札先や配置売薬の行商で各地を歩きまわっていたことである。渡辺詮吾が岡山でテリアカの製法を学び、それをもとに近江初のテリアカをつくったように、製剤の知見とともに、その原料も調達していたと思われる[21]。そうした動きをみていくことで、外部から得た知見や材料を地

20）くすり学習館ブログ記事「甲賀のくすりをまちづくりに活かす「甲賀のくすりコンソーシアム」が設立されました」人と薬の関わりを体験・学習｜甲賀市 くすり学習館（http://www.kusuri-gakushukan.com/）（2020 年 2 月 28 日閲覧）。

21）例えば、渡辺詮吾の子息が設立した製薬会社の近江製薬は、そのホームページに和漢薬の原料として沈香末や龍脳など熱帯産の材料をふくむことが紹介されている。近江製薬株式会社 公式サイト 萬病感應丸 A 本舗（ohmi-seiyaku.com）（2020 年 3 月 21 日閲覧）。

元のものと組み合わせて、甲賀に特有のくすりをつくりだそうとしてきたことを見出す可能性も開けてくるのではないか。

そのさいには、甲賀生まれの人びとだけでなく、外部から甲賀の薬業や薬草の利用にどんな人物がかかわったのか、とくに滋賀県と隣接する京都や三重から鈴鹿山脈を訪れた本草学者や、京都から訪れた薬種問屋などが、甲賀の薬草や薬業とどのようなかかわりがあったのかを見ていくことが求められる。加えて、江戸時代から明治にかけての政府が鈴鹿山脈の薬草をどうみていたのかを、海外貿易との関係を視野にいれて検討することで、当時の政策と地域との関係を同時代のアジアにおける薬草の流通のなかに位置づけることもできよう。本稿は甲賀の薬業から配置売薬の起こりをみてきたが、富山や奈良など配置売薬で知られるその他の地域と比較した時にどんな特徴があるのかをみていくことで、甲賀の薬業を相対的に位置づけることができるだろう。

以上のような甲賀の薬業や薬草の利用に関する歴史への関心を深めるとともに、それを現在の地域活動にどのようにいかすことができるかを、地域の環境と文化や健康や産業との関係も視野に入れて「くすり」にかかわる学問を現場の実践につないでいくことが期待される。

謝辞

本研究は、総合地球環境学研究所プロジェクト「生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会－生態システムの健全性（D06-14200119）」の一環として甲賀市で実施したフィールドワークおよび文献調査で収集した資料を参照した。甲賀でのフィールドワークでは SATOYAMA+、大久保里山再生員会、甲賀市くすり学習館、甲賀忍術研究会をはじめ、地域活動にとりくむ団体、現地にお住まいの皆様から薬草にかかわる歴史と現状を学ぶ機会をいただきました。CIRAS 共同研究研究会での発表では研究会メンバーの阿部大地氏、岡田雅志氏、柳澤雅之氏をはじめ、甲賀市在住の中島教芳氏、市川ゆきひろ氏、滋賀県立大学の高橋卓也氏よりコメントをいただきました。ご助言、ご助力をいただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

参考文献

油日創意と工夫の郷づくり委員会（1998）『ふるさと油日』油日創意と工夫の郷づくり委員会／甲賀町 .

福岡誠行（1965）「伊吹・鈴鹿山脈の植物地理」『*Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*（植物分類・地理）』11(5-6): 133-140.

石橋弘之・石田卓也・高橋卓也（2020）「上流の森を保全する多様な主体の「緩やかなつながり」」. 脇田健一・谷内茂雄・奥田昇（編）『流域ガバナンス：地域の「しあわせ」と流域の「健全性」』京都大学学術出版会，pp. 117-132.

石丸正運（2005）「飯道山」木村至宏『淡海文庫 33 近江　山の文化史――文化と進行の伝播をたずねて』サンライズ出版，pp. 111-117.

人物誌編集委員会編（1980）『甲賀人物誌』甲賀町教育委員会.
神郷土史編集委員会編（1999）『ふるさと神村』滋賀県甲賀郡甲賀町大字神.
甲賀市史編さん委員会編（2007）『甲賀市史第 1 巻　古代の甲賀』甲賀市.
甲賀市史編さん委員会（2014）『甲賀市史第 3 巻　道・町・村の江戸時代』甲賀市.
甲賀市史編さん委員会（2015）『甲賀市史第 4 巻　明日の甲賀への歩み』甲賀市.
甲賀市史編さん委員会編（2016）『甲賀市史第 8 巻 甲賀市事典』甲賀市.
大原貯水池土地改良区（2003）『土地改良区設立 50 年記念誌 水六十年』大原貯水池土地改良区.
滋賀県・甲賀市（2018）『甲賀市森林整備計画（案）平成 30 年樹立』.
進藤勝美（1992）「甲賀・日野の薬業――その生成と現状」『聖隷学園聖泉短期大学人文・社会科学論集』pp. 54–86.
杣庄章夫編（1975）『滋賀の薬業史』滋賀県薬業協会.

第 2 章

17 世紀のカンボジアにおける交易勢力と交易品

遠藤正之
立教大学

1.　はじめに

17 世紀のカンボジアについては、繁栄と栄光の時代とされるアンコール時代（802 ～ 1431）に対し、長期間にわたる衰退期（ポスト・アンコール時代：1431 ～ 1863）の一部という見方が支配的だった。しかしながら、このような見方は 1990 年代以降次第に見直しが進み、当時のカンボジアは「交易の時代」の東南アジアにおける主な勢力の一つであったことが指摘されるようになりつつある[1)]。

本稿では、17 世紀のカンボジアにおいて交易勢力＝交易活動に携わった人々と、彼らが扱った産品を取り上げ、当時のカンボジアを取り巻く交易状況について概観する。当時カンボジアで活動していたオランダ人の記録[2)]を主に利用しつつ、王権を取り巻く各交易勢力の相互関係と交易産品の流れに彼らがどのようにかかわっていたかを明らかにし、当時のカンボジアが「交易の時代」の東南アジア世界において十二分に存在感を示していたことを改めて明確にしたい。

2.　17 世紀カンボジアの主要な交易勢力

本節では、当時のカンボジアにおける交易勢力について概観しつつ、各勢力の相互関係についても論じる。

オランダ人が商館を開設した時期（1636 ～ 67）[3)]までには、カンボジアにはすでに様々な人々が来航し、交易活動に携わっていた。そのうち、華人に 2 名、

1）［Mak Phœun 1995］［北川 2006: 102–154］［遠藤 2017］など。

2）史料として、ミューレルが編纂したカンボジア・ラオス関連史料集［Muller 1917］、バタヴィア城日誌（以下 DRB と略）などを利用する。

3）これ以前、1622 年にもオランダは商館を開設したが、この時はアユタヤからの抗議によって、すぐに閉鎖している。

マレー人、日本人、ポルトガル人に各１名のシャーバンダル[4]がいたという。このことは、この４つの勢力が居住人口も多く[5]、当時のカンボジアで特に重要な地位を占めていたことを示したものと考えられる。ここではこの４勢力を中心に据えつつ、彼ら以外の諸勢力の活動についても言及する。

1） 華人

オランダ人の記録によると、彼らがカンボジアに初めて来航した時、すでに華人は活発に活動していたが、いわゆる「（普通の）華人」と「イスラーム化した華人」の二種類がいたという。当時カンボジアは、1567 年の明朝による海禁政策の緩和以降、華人の重要な活動拠点となったマレー半島東岸の港市国家パタニと盛んに交易を行っており、同地でイスラーム化した華人が相当数来航・活動していたものと考えられる。さらに、中国本土から来航する華人も加わり、16 世紀末から 17 世紀初めにかけ、その数は増加の一途をたどった。

イスラーム化した華人の代表者、プレスコルニョクは、当時カンボジアにおいて有力商人の一人として活動しつつ[6]、華人シャーバンダルの一人でもあった[7]。彼には、もう一方の華人の代表者グワンピックや日本人商人らとともにラオスに買い付けに向かった記録があり[8]、「普通の」華人や日本人と円滑な関係を保っていた。また、イスラームを通じてマレー人とも良好な関係にあった。

しかし、1650 年代に入ると、海域世界におけるパタニの重要性が低下したことにより、カンボジアとの交流が次第に衰退するのに伴って、パタニから来航する華人の活動も減退した。その一方で、福建・台湾に拠点を置く台湾鄭氏船（国姓爺船）の来航が増加するのに伴って、鄭氏の影響下にある華人の活動が高まった。世代交代も進み、イスラーム化した華人は華人人口の中で次第に比率を減らし、活動も次第に衰えていった。さらに、当時シナ海域で活発に活動していた鄭氏政権を抑える目的で、清朝が遷界令を発したことで、本土から来航する華人の数も減り、カンボジアで活動する華人の多数を、鄭氏系の華人が占めるようになった[9]。

影響力を強めた鄭氏系華人は、王権と結びつき対日本交易を担当する主要な

4） ペルシア語で港の王の意。中世以降のインド洋一帯で広く見られ、港市での来航外国人にかんする領事業務・貿易管理を担当した［桃木 1996: 43］。

5） 推定ではあるが、当時の華人人口は約 3000 人、日本人は約 350 人、ポルトガル人はおよそ 1000 ～ 1200 人がいたとされる［岩生 1966: 331］［Kraan 2009: 13］。これに対し、例えばオランダ人は商館員全員を合わせても、十数名に過ぎない［山脇 1980: 141–143］。

6） ［Muller 1917: 138］。

7） ［DRB 1641: 90］。

8） ［岩生 1966: 362］。

9） 1665 年のオランダ商館長日記には「タタール人のように頭を剃った華人」、すなわち辮髪にした華人の記録もあり［Muller 1917: 424］、少数ながら鄭氏の影響下

勢力として活発に活動した。それは、対日交易独占を目論むオランダ人との対立激化につながった。彼らは、1667 年にオランダ商館を焼き討ちし、VOC を最終的にカンボジアから撤退に追い込んだ。しかし彼らは、横暴な行為も多く、1670 年までにカンボジアから追放された。

1683 年に台湾鄭氏が降伏し、清朝が展海令を発布すると、中国本土から来航する華人の数は増加に転じた。しかし、この時期にはカンボジアが内乱状態に陥り、王都近辺の治安が悪化したため、従来の活動域であったメコン、トンレサープ流域からシャム湾沿岸へと活動の重心を移していった。

2） マレー人

華人と並んで重要な存在だったのがマレー人である。1567 年の明の海禁政策解除後、華人商人が東南アジア海域に大規模に進出するようになるとシャム湾に面した港市パタニが重要な中継港となり、シャム湾においてマレー人商人の活動が活性化し、カンボジアとパタニの関係も親密になった[10)]。それに伴って、カンボジアに来航して活動するマレー人の数も増加した。彼らは軍事力として宮廷で重きをなす一方、海域世界とカンボジアの関係を取り持つ役割をも果たした。

オランダ人が来航する頃には、彼らの活動はさらに拡大した。まず彼らは、ラオスとの交易で重要な役割を果たした。オランダ人の記録によると、1641 年のラオス探検の際、通訳を務めたのはマレー人であった。ラオスの王都ヴィエンチャンではマレー語が通用し、ラオス側も交渉役としてマレー人を派遣してオランダ側と交渉した。また、カンボジア王都でもラオス商人がマレー人町に在住しており、両者は密接な関係にあった。

一方、マレー人はカンボジアが VOC との交渉を行う際にも重要な役割を果たした。1643 年のオランダ商館長殺害事件とそれに伴う 1644 年の戦争によって、カンボジアと VOC の関係は一時的に断絶するが、その後の両者の関係再構築の際、交渉役を担ったのもマレー人だった。このような関係は、オランダ商館が閉鎖された後の 1670 年代まで続いた[11)]。

さらに彼らはカンボジア王権とも密接な関係を保った。1642 年に王位についたナック・チャンは、内陸部と海域世界を結びつける彼らの役割を重要視し、関係強化を図ってイスラームに改宗した。マレー人の代表者であるインチェ・アッサムは高官に取り立てられ、交易でも重要な役割を果たすなど、同王のもとで彼らは重用された。1658 年にナック・チャンが廃位されると、彼らの

にない華人も存在していた。当時の状況から、彼らは広州、あるいはマカオからの来航者であった可能性が高く、後者である場合はその船はポルトガル人の委託を受けた華人船であったと考えられる。

10) マレー人有力者であるインチェ・アッサムがパタニ出身者であることからも、パタニとカンボジアの密接な関係が伺える［Muller 1917: 132］。

11) 1670 年代にカンボジア国王からバタヴィア総督に贈られた書簡の大半がマレー語で記されていることも、それを裏付けている［遠藤 2017: 79］。

活動に反感を持った新国王によって一時活動を抑制されたが、1670 年頃には、その国王が VOC との関係再構築を望んで方針を転換したことにより、復権を果たした。

その後もカンボジア王権と一定の関係を保ち、王宮で影響力を発揮する一方、17 世紀末以降は華人と並んでシャム湾沿岸地域でも活動するようになっていった。

3） 日本人

カンボジアにおいて、日本人の活動は 16 世紀末のスペイン人の記録から確認できる。17 世紀に入ると、東南アジア各地に朱印船が派遣されたが、カンボジアも主要な渡航先の一つとなり、王都には日本町が形成された。彼らは鹿皮など日本向け産品の交易に携わり、国王に仕えて活躍した者もいた[12)]。また、オランダ人と密接な関係にあり、彼らを管轄するとともに、通訳として彼らとカンボジア宮廷の間を取り持つ役割も果たした。彼らの活動は、1630 年代の江戸幕府の一連の海禁政策（いわゆる「鎖国令」）の完成により日本からの渡航者が途絶したことで衰退したが、1660 年代まで確認できる。

4） ポルトガル人

ポルトガル人も、16 世紀末にはすでにカンボジアで活動していたが、1641 年にオランダがマラッカを獲得すると、ポルトガル人コミュニティーは急激に人口を増やした。当時、少なくとも 200 人の「白い」ポルトガル人と 800 ～ 1000 人の「黒い」ポルトガル人がいた[13)]。彼らは、日本、マカオとの交易に携わったが、交易独占を目論むオランダ人とは激しく対立した。特に、1642 年、彼らがオランダ人を殺害した事件は王権を巻き込む訴訟事件へと発展し、最終的に 1643 年の国王によるオランダ人商館長殺害事件の遠因ともなった。また、彼らは王権とも密接なかかわりを持ち、高官として国王に仕えた者もいた[14)]。その一方で、他の東南アジア大陸部諸国とは異なり、彼らが傭兵として活動していた[15)] ことを示す記述はカンボジアについては見られず、実態がどのよう

---

12) その中でも森嘉兵衛という人物は 1630 年代からカンボジア宮廷に仕え、1642 年に国王から日本人シャーバンダルに任命されるなど、王権と結びついて活躍した。彼の出身及び経歴は不明であるが、岩生成一は鎖国以前にカンボジア貿易に携わった長崎の町人森助次郎の一族ではないかと推測している［岩生 1966: 109–112］。

13) 前者はヨーロッパ血統、後者はキリスト教徒でポルトガル語を話すアフリカ、南インド、あるいはシンハラ系の人々だった。ただし、当時のオランダ商館長の報告によれば、ポルトガル人を管轄していたのは華人シャーバンダルだったという［Kraan 2009: 13］。当時ポルトガル人シャーバンダルの地位が何らかの理由で空席になっていたか、ポルトガル人の人口が急速に増加したことに対し、臨時にそのような処置が取られたのかもしれない。

14) ［北川 2009: 90-92］。

なものであったかについての解明は今後の課題である。

5） その他、当時カンボジアで活動していた人々

以上述べた 4 勢力以外に、カンボジアで活動していた人々として、ラオス人、コーチシナ人、オランダ人をはじめとする、ポルトガル人以外のヨーロッパ人が挙げられる。彼らも、数は少ないものの活発に活動し、カンボジアで一定の存在感を示した。

①ラオス人

現在のラオスと東北帯を勢力圏としていたラーンサーン王国に居住する人々を指す。ラオスを中心とするメコン川上流域は、鹿皮、漆、安息香など、東西交易の重要な商品となる森林生産物の産地であり、彼らはそれらの産品をメコン川を介してカンボジアへ運搬した。当時、ラーンサーン王国は安定期にあり、メコンルートの治安も保たれ、彼らの活動は活性化した。加えて、アユタヤがラオス商人の待遇を悪化させたため、彼らはアユタヤを避けてカンボジアに来航するようになった[16)]。こうして、カンボジアにおけるラオス商人の活動が盛んになった。彼らはマレー人と親密な関係にあったため、王都ではマレー人シャーバンダルの管轄下に置かれ、マレー人や華人商人にラオス産の森林生産物をもたらした。

②コーチシナ人

コーチシナ（広南国[17)]）の住人を意味し、同地に住むベトナム人・華人をまとめてそのように称したものと考えられる。交易面では、広南に米を輸出するなど、カンボジア・広南間の交易に携わると同時に、広南を中継地とした対中・対日交易にも携わった。また、兵士として国王に仕えた者もいた。彼らと関係の深かった勢力は、広南との関係の深さからポルトガル人か華人の可能性が高く、どちらかのシャーバンダルの管轄下にあったと考えられる。

③ポルトガル人以外のヨーロッパ人：オランダ人、イギリス人、デンマーク人、スペイン人

当時、東南アジアにはヨーロッパ人も多数来航していた。先述したポルトガル人以外にも、オランダ人、イギリス人、デンマーク人などが拠点を築き、交易活動に携わっており、カンボジアも例外ではなかった。彼らの人数は商館長を中心にせいぜい十数名に留まり、数的には大きなものではなかった。しかし、

---

15) ペグーやアユタヤでは、彼らが火器の使用に長けた傭兵として王権に重用されたことが知られる。

16) ［ファン・フリート 1988: 123］。

17) 現在のフエ、ホイアンを拠点とし、紅河デルタを拠点としたトンキン（後期黎朝）と抗争した。

交易活動において、彼らはカンボジアでかなりの活躍を見せた。

オランダ人は、1636年カンボジアに来航し、翌年商館を開設した。彼らはすぐに積極的に活動を開始し、先行していたポルトガル人と対立しつつも、日本人、華人、マレー人らとの関係を深め、交易活動の拡大を図った。しかし、対日本交易の独占を志向する彼らの姿勢は、王権強化のために交易独占を目論むカンボジア王権と衝突し、ポルトガル人との対立問題も絡んで、1643年に商館長殺害事件が起こり、そのことが翌44年に軍事衝突へと発展し、結果として両者の関係は一時断絶した。しかし、その後すぐに関係修復のための交渉が開始され、1656～57年に両者間に和平が結ばれた。オランダ人はこれを梃子に対日本交易の独占を図ったが、カンボジア王の巧みな対応により、はかばかしい成果を挙げられなかった。1658年にカンボジアに反乱が起こり、隣国広南の軍が反乱側の援軍としてカンボジアに来襲すると、商館も焼き打ちされ、館員はアユタヤに避難した。1665年には再度条約が結ばれて、商館は再開されるが、対日本交易の独占を図るオランダ人の活動は、当時対日本交易を重視し、その活動を活発化させていた華人が台湾鄭氏系であった[18]こともあり、彼らとの対立激化に直結した。その結果、1667年に商館は彼らに焼き討ちされ、商館長らは殺害され、これを機にカンボジアのオランダ商館は閉鎖されることになった。その後もカンボジア国王とバタヴィアの総督府の間で交流は続いたが、カンボジアに拠点を築いてオランダ人が活動することは、これ以降なくなっていった。彼らは、はじめ華人シャーバンダルに管轄されたが、国王に要請して、1640年代以降は日本人シャーバンダルの管轄下に入った。このことからも対日本交易を重要視するオランダ人の意志は明らかといえる[19]。

イギリス人とデンマーク人は、ジャワ西部に存在した港市国家バンテンに拠点を置き、カンボジアを含む東南アジア各地で活動した。前者は、1651年にカンボジアに商館を開き、交易活動を行ったが、十分な成果を上げるには至らず、1656年に商館を閉鎖した。しかし、その後も彼らは、1658年までは定期的にカンボジアに来航した。彼らが重要視した商品は、安息香と蠟で、これらをバンテン経由でインド方面へ運んでいた。後者の活動については、不明な点が多いが、1658年に起きた反乱の際、国王が支援を求めたヨーロッパ人勢力の中にデンマーク人の名前があることから、彼らもカンボジアに来航して活動していたことが確認できる。彼らを管轄したのが誰であるかは不明であるが、彼らがバンテンを拠点に活動し、またバンテンにカンボジアからマレー人がしばしば訪れていたことを考慮すると、マレー人の可能性が高いと思われる[20]。

このほか、スペイン人も来航した記録が見られる。彼らも安息香など、ラオ

---

18) 1662年の鄭成功による台湾占領によって、VOCは台湾鄭氏を敵対勢力とみなしていた。

19) 1657年に国王が彼らをマレー人シャーバンダルの管轄下に移そうとした際にも、彼らはこれを拒否し、日本人シャーバンダルの管轄下に留まった［Muller 1917: 364］。

20) 1658年の反乱の際、「イギリスのシャーバンダル」が殺害されたという記事があ

スからもたらされる森林生産物を求めて来航した。ただし、彼らがカンボジアに拠点を築いて活動していた形跡は見られず、マニラから派遣された船が単発で来航する程度であったと考えられる。

3.　カンボジアの主要な交易産品とその流れ

カンボジアには、広大な平原地帯があり、そこでは伝統的に稲作が盛んであった。また、現在のベトナム・タイの国境地帯とシャム湾沿岸から少し内陸に入った地域は山岳地帯であり、豊かな森林が広がっている。加えて、豊富な水量をたたえ、内陸とカンボジアを結びつけると同時に、豊かな漁場でもあるメコン、トンレサープ両水系とトンレサープ湖がある。このような環境はカンボジアに様々な交易産品をもたらした。

本節では、カンボジアの主要な交易産品とそれがどのような人々の手で、どのような地域に運ばれたか、またその代価としてどのような品物が用いられたかについて述べる。

1）　森林生産物①：黒漆、鹿皮、蘇木

これらは、主にカンボジアからラオスにかけての森林地帯で生産され、現地の人々が採集したものを、ラオス商人やカンボジアからラオスに赴いた華人、日本人、マレー人が集荷してカンボジア王都に運び、そこから主に華人船やオランダ船によって（朱印船時代には朱印船も）日本や中国に向けて運ばれた。特に日本は最大の需要者であった。

中でも黒漆は、当時カンボジアが東南アジア最大の輸出地であった。それは日本に運ばれたのち、漆器として加工され、完成品が再度海外へ輸出された。鹿皮と蘇木は、シャムのものが有名であるが、カンボジアにとっても重要な輸出品であり、前者は袴、羽織、足袋などの原料として[21]、後者は染料として用いられた。

2）　森林生産物②：安息香、麝香、蠟

いずれもラオスの産品として知られ、このうち安息香は当時のインドで大量の需要があった。ラオスからカンボジアへは、①と同様、華人、日本人、ラオス人、マレー人らによって運ばれた。ただ、これらの商品は、バタヴィアへの主要輸出産品としてオランダ語史料にしばしば登場することから、マレー人やオランダ人によってバタヴィアへ運ばれ、さらにはインド方面へと運ばれたと

る［Muller 1917: 372］が、これは「イギリス人を管轄するシャーバンダル」を指すと考えられ、マレー人に対する反乱軍の反発姿勢から判断すると、この人物がマレー人であった可能性は高い。

21) 当時木綿は貴重品であり、足袋の原料として使われたのはもっぱら鹿皮であった［岩生 2005: 290］。

考えられる。また、当時からインドに拠点を持っていたイギリス人もこれらの産品に大きな関心を示し、大量に仕入れ、バンテン経由でインドへと運搬した。麝香も安息香ほど大規模ではないが、ラオス産のものが有名で、バタヴィアからインドへと運ばれていた。

また、蠟については、蜜蝋とカイガラムシ蠟の二種類があったが、いずれも蝋燭、化粧品、つや出し材の原料として、バタヴィア、インド、日本、中国へも運ばれていた。

3） 米

米は当時のアジア全域において、食料として重要な位置を占めていた。メコン、トンレサープ両水系周辺に広がる氾濫原では、カンボジア人農民の手で浮稲栽培が行われ、大量の米を産出した。米は、国内で消費されるばかりでなく、バタヴィア、海域世界の諸港市国家及び広南へと輸出された。

バタヴィアのあるジャワ島は米の産地であったが、VOC は内陸農村部を掌握するマタラム王国との関係を円滑に保てず、希望通りに米を入手できなかったため、輸入に頼らざるを得ず、輸入先の一つとしてカンボジアを重視した。

海域世界の諸港市国家（ジョホール、マラッカ、パタニなど）は、米を十分生産できるだけの土地を欠いていたため、17 世紀以降、カンボジアは米の輸入先の一つとして重要であった。これらの地域には、マレー人が盛んに航海して、米を運搬した。

一方、中部ベトナムを拠点とした広南も、米の生産に必要な平野部が狭く、生産量に限界があった。加えて、ハノイ、紅河デルタを拠点とするトンキンと断続的な戦争状態にあり、これに対抗する軍事力＝人的資源を維持するためにも、安定した食料の供給が必要だった。このため、広南にとってカンボジアの米は重要であった。広南に米を運んだのは、同地とつながりを有する華人、コーチシナ人、ポルトガル人らであったと考えられる。このように、米もまたカンボジアにおいて重要な商品の一つであり、古米と新米のどちらを売るかを巡って、国王と商人たちの間で対立が起きることもあった[22)]。

4） その他の産品

その他重要な産品として、干し魚が挙げられる。カンボジアは、東南アジア有数の淡水魚の漁場である、メコン、トンレサープ両川及びトンレサープ湖を抱え、漁業も盛んである。17 世紀のオランダ語史料には、カンボジアから来航したマレー人船がもたらした商品として、干し魚がしばしば登場する。

最後に、生薬類として、カルダモン、雌黄（ガンボージュ）、山帰来などがオランダ、イギリスの文書に現れるが、量、史料に登場する回数とも少なく、これまでに挙げた産品に比べると重要度はそれほど高くなかったと思われる。

22）［岩生 1966: 108, 367–368］。

5） 対価となった商品

①インド綿布――海域世界からの産品

16 世紀の交易の隆盛により、東南アジア全域でインド綿布の使用が広がり、商品としても重要になった。それはカンボジアでも同様であった。特にラオス産品を入手するために、それは非常に重要なアイテムだった。加えて、カンボジアの交易上のライバルであるシャムが、ラオスに毎年 4 万枚に及ぶインド綿布を持ち込んでいたため、カンボジアがラオス交易で優位に立つためには、シャム以上にインド綿布を持ち込む必要があった。この際に重要な役割を果たしたのがマレー人だった。彼らは、マレー半島、マラッカ海峡域の諸港市国家を通じてインド綿布を入手するとともに、その産地であるコロマンデル海岸に商館を構えて綿布交易を盛んに行っていた VOC とも良好な関係を保った。こうして、カンボジアの輸出品の対価として、バタヴィアや海域世界の諸港市国家からインド綿布がもたらされるという構図が固まった。その結果、1640 年以降、カンボジアではインド綿布を大量に入手でき、米や森林生産物を大量に入手できる状況になった[23)]。

②日本からの産品

一方、日本に輸出された、漆や鹿皮、蘇木などの対価となったのは、日本産の銀、銅、鉄、硫黄、樟脳、雑貨や工芸品などだった[24)]。特に銅は、貨幣の原料としての重要性に加えて、大砲を鋳造する原料でもあり、各国の王侯にとって必需品だった[25)]。また、工芸品の中では、肥前を中心とした陶磁器が重要である。当時の王都跡で採取された 16 世紀後半～ 18 世紀前半の陶磁器片の中には、中国陶磁器に加えて、日本の肥前産の磁器が含まれている[26)]。こうした産品が日本からもたらされたことは、オランダ語史料の記述からも確認できる。

③広南からの産品

カンボジア米の重要な輸出先の一つであった広南からの対価としては、絹と砂糖が重要であったことがオランダ語史料から確認できる。同時に、広南は中国や日本との中継地点としても重要であったから、中継交易で入手した日本や中国産の産品も含まれていた可能性も否定できない。

以上、3 つの産品は、いずれも現地の、特に富裕層の服飾、嗜好品として珍重され、威信材としての役割をも果たしたものと考えられる。

23）［遠藤 2017: 25; 27］。

24）［岩生 2005: 275–276］。

25）［石井・桜井 1985: 219］、ただし、カンボジアにおいて当時銅銭が使用された記録は管見の限りなく、それが発掘されたという事例も今のところ見られない。

26）［北川 2006: 136; 150–154］。

おわりに

本稿では、17 世紀のカンボジアで活動した交易勢力と、彼らがカンボジアから各地へともたらした交易品及びその対価となった商品について考察した。

主要な史料として利用したオランダ語史料の分析から見えてくるのは、17 世紀のカンボジアは、決して衰退の時代ではなく、各勢力が相互に関連して交易活動に携わり、「交易の時代」の東南アジアの一翼を担っていたということである。

今回利用したオランダ語史料は、膨大な VOC 関連文書の一部に過ぎず、今後さらに分析を広げることで、新たな情報を得ることが期待できる。これについては、今後の課題としたい。

参考文献

Dagh-register, gehouden int Castessl Batavia vant passerende daer ter plaetse Als over geheel Nederlandts-India. 31 vols. 1624-82. The Hague: Martinus Nijhoff.

Kraan A.van der (2009) *Murder and Maybem in Seventeenth-Century Cambodia—Anthony van Diemen vs. King Ramadhipati I*. Chiang Mai.

Mak Phœun (1995) *Histoire du Cambodge de la fin du XVIe siêcle au début du XVIIIe*. Paris.

Muller, H. (1917) *De Oost-Indische Compagnie in Cambodja en Laos.1636-1670*. Linschchoten Vereeniging 13. The Hague.

遠藤正之（2010）「カンボジア王ラーマーディパティ 1 世（在位 1642 ～ 58）のイスラーム改宗とマレー人の交易活動──オランダ東インド会社との関係をとおして」『東南アジア 歴史と文化』39（東南アジア学会）pp. 28–51.

遠藤正之（2014）「カンボジア・オランダ東インド会社間通商平和条約締結（1656 ～ 57）──カンボジア王権とオランダ東インド会社の交易独占の試みをめぐって」『史苑』74–1（立教大学史学会）pp. 9–34.

遠藤正之（2017）『カンボジアにおけるマレー人の活動──16 ～ 19 世紀を中心に』（立教大学文学研究科史学専攻博士学位論文）.

ファン・フリート（1988）「シアム王国記」『フーンス、フリート、コイエット　オランダ東インド会社と東南アジア』生田滋訳，大航海時代叢書第二期 11，岩波書店.

岩生成一（1966）『南洋日本町の研究』岩波書店.

岩生成一（2005）『日本の歴史 14　鎖国』中公文庫（新装改版）（初版：1974 年）.

石井米雄・桜井由躬雄（1985）『東南アジア世界の形成』ビジュアル版世界の歴史 12，講談社.

北川香子（2006）『カンボジア史再考』連合出版.

北川香子（2015）「ヨーロッパの船が河を遡ってきた頃──17 世紀カンボジア史再考」『南方文化』第 41 輯.

桃木至朗（1996）『歴史世界としての東南アジア』世界史リブレット 12，山川出版社.

永積洋子（編）（1987）『唐船輸出入品数量一覧 1637 ～ 1833 年──復元 唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳』創文社.

山脇悌二郎（1980）『長崎のオランダ商館──世界のなかの鎖国日本』中公新書 579.

第 3 章
薩摩博物学年表統合版

岡田雅志
防衛大学校人間文化学科

1.　はじめに──薩摩博物学年表統合版作成について

本篇は旧薩摩藩（現在の鹿児島県及び宮崎県の一部、地図参照）の領域における博物学関係の歴史事項をまとめた 3 篇の年表の統合を試みたものである（小文の後に掲載）。3 篇の年表とは、1934 年に刊行された長井實孝編「薩摩藩博物学年表」（長井 1934）（以下、長井版）、内藤喬編『薩藩の薬園と本草学』（内藤 1937）に載せる「薩藩博物学年表」（以下、内藤版）、1982 年刊行の上野益三『薩摩博物学史』（上野 1982）に載せる「薩摩博物学年表」（以下、上野版）である。2019 年度の共同研究報告書（岡田・柳澤 2020）において、薩摩地方のシナモン（肉桂、桂皮、同地ではケシン、ケセンと呼ばれる）を扱って以来、共同研究班では、薩摩地方の豊かな自然環境、交易を通じた開放性ゆえに、この地が薬用植物にとどまらない生物種の十字路となり、それゆえに独自の本草学、博物学が発展してきたことに注目してきた。その過程で上記の年表の存在を知り、大いに裨益させられた。ただ、各年表の間には異同や相補する内容があるため逐一照合するのに不便である。そこで、統合版を作成し、先学の成果を通覧できるようにすることで、我々の今後の研究の進展のみならず、薩摩地方の博物学、博物学史研究にも幾ばくか資するところがあるのではないかと考えた。

2.　各年表について

ここでは統合作業の対象とした 3 篇の年表について現在分かっている範囲において簡単に説明しておく。

①　長井版

長井版は鹿児島高等農林学校開校 25 周年を記念して刊行された論文集に掲載されている。鹿児島高等農林学校は 1908 年に設立された旧制専門学校で、鹿児島大学農学部の前身である。年表を作成した長井實孝の詳しい来歴は確認できていないが、この論文集が職員及び同窓会員の研究成果を公刊するもので

あることと、序文において長井が「本編を草するに当り、指導並に校閲の労を賜はりし、恩師本校岡島銀次教授及び文献閲覧に種々の便宜を与へられし県立、本校両図書館員に感謝の意を表する次第なり。皇紀二千五百九十四年梅花節鹿児島高等農林学校動物学教室にて　編者記す」と記していることから鹿児島高等農林学校出身者であることがわかる。長井の師である岡島銀次(1875-1955)は、昆虫学を専門とするが、広く博物関係の知識の涵養を重視し、鹿児島高等農林学校博物同志会を主宰し、さらには鹿児島県博物学会を創設した人物である（末永 1955)。長井もおそらく博物同志会のメンバーであったであろうし、博物学年表作成は博物同志会の活動と関連して行われたものである可能性が高い。長井版の序には、「郷土史を繙き、其中より抜萃したるものをここに蒐録せり」とあり、参考文献を見ると、自治体史などの二次文献の他、『島津国史』などの基本史料も博捜して作成されているようである。

②　内藤版

内藤版は、言葉遣いの異同はあるものの、長井版の内容とほぼ重複している。年表編の末尾に「以上年表は長井實孝氏の調査によるものなるが、之は尚補遺訂正すべきもの多々あるべく、後日諸賢の援助によりて之が完璧を期する次第である。昭和一二年一月二十一日稿了」と記されている。いくつか長井版にのみに記載のある事項（年表の通し番号 50、66、67、80、96、98、144、145）があることもあわせて考えれば長井版そのものではなく長井版の草稿に基づき作成されたものであると考えられる。内藤喬（1891-1957）は当時、鹿児島高等農林学校植物学教室の教授であり、九州・南西諸島の民俗植物研究を専門としていた。内藤が上述の博物同志会のメンバーであったかの確認はできていないが、同校の博物学に関心を持つ人士の間で長井版の草稿が共有されていたことが窺われる。

言葉遣いの差異以外で異なる点としては、長井版は和暦、干支、西暦を併記しているのに対し、内藤版はそれらに加えて皇紀も記している（本年表においては干支及び皇紀は省略した)。また、縦書きの年表の上部に年表事項に関係する物産名を記している。加えて、下部に備考欄が設けられ、同じ年に起きた日本史の重要事項について記載されている（但し備考欄があるのは 1603 年まで)。博物学と関係のない内容が多いが、本年表にも掲載した。

内藤版を収めた『薩藩の薬園と本草学』は未刊の手稿本であるが、広く頒布される目的で書かれたものであると思われる。本書は「本草学及薬園の沿革」「薩藩博物学年表」「附録」の 3 編から成っており、薩摩についての記述があるのは「薩藩博物学年表」のみで、「本草学及薬園の沿革」は日本における本草学、採薬に関する古代から江戸時代までの沿革を概述し、「附録」は『古事記』に見られる薬用植物などについて記載したものである。書名と内容とが必ずしも合致していないようにも思われるが、上野益三によれば内藤喬は本書前年に刊行された『薩藩の文化』（鹿児島市 1935）の「第三　薬園と本草学」の筆者

であり（上野 1982: 3)、あるいは、本書は『薩藩の文化』のために準備した原稿の内、掲載されなかった内容をまとめたものかもしれない。

③　上野版

上野版は、著名な生物学者であり、博物学史研究の第一人者であった上野益三（1990–1989）が近世から近代に至るまでの薩摩の博物学の形成と展開を論じた『薩摩博物学史』の巻末に掲載された年表である。主題に合わせて年表は 1543 年より始まり、18 世紀以降の薩摩藩の博物学の隆盛と幕末・明治期の近代動植物学の影響に関する事項が充実している。また、上野版は、島津文書などを含め各種関係史料を渉猟し薩摩の博物学史を一新させたともいえる上野の研究成果を反映した記述となっている。その一例として『質問本草』に関する記述がある。1785 年に成立した『質問本草』は薩摩から南西諸島に及ぶ地域に自生する植物各種について図譜及び中国人への聞き取りにより同定された漢名ほか、和名、効能などを記した調査記録とも言えるものである。この『質問本草』の編者について、長井版では従来言われてきた通り、薩摩藩が琉球の学士呉継志（長井版では呉継子）に依頼して作成したものとするが（年表 193)、上野版では呉継志は仮託の人名であるとする（年表 187)。その背景には、実質的に薩摩に服属していた琉球であるが、それは秘匿され清との朝貢関係を維持しており、それを利用して薩摩が密貿易を行っていたという当時の複雑な事情があったとされる。『質問本草』をはじめ、薩摩の博物学の歴史については近年高津茂によってさらなる研究が進められている（cf. 高津 2017)。

以上見てきた 3 篇の年表を統合することによって、その国際交易上の位置及び自然環境の下、生物種の十字路となってきた薩摩地方の博物学及び博物学史の豊かな研究成果を通覧することができるはずである。もちろん、これとても網羅的なものではなく（年表の作者達ももとよりそれを期していない)、例えば、動植物の伝来について、1853 年に岡山よりネズムロノキの苗を取り寄せ栽植したことについては記載がない（鹿児島市史編さん委員会編 1969: 462)。また、これらの年表は主に島津藩の関係史料に依拠したものであるが、地方史料や口碑資料の世界に踏み込めば、さらなる膨大な情報が得られると思われる。それらが即史実となるわけではないが、そうした史料・伝承の収集、分析を積み重ねることで薩摩の地域社会と生物資源との関係史を明らかにすることができると考える。今後こうした作業を進めていく上でも先学の成果である本年表が道標となるであろう。

3.　年表凡例

ここでは長井版及び統合版の凡例を示す（上野版、内藤版には凡例なし）。

[長井版凡例]

1. 本編にては全て薩摩藩主島津公を中心として記述したり。
2. 本編は我が薩摩藩に関する旧聞遺事、先輩の生没、本草家の往来、著述の年月、薬園の興廃、鉱石の発掘、動植物舶来の歳月、薩摩藩と幕府其他との献賜等を蒐録して、薩摩藩に於ける博物関係の一般を知らしめんとす。
3. 博物学は農林学、水産学、地理学等其他の科学にも密接なる関係あるを以て、間々其事蹟を記載せり。
4. 幕府と薩摩藩との献賜の史実は余りに繁雑に過ぐるを以て、多くは之を略記せり。
5. 本編中、大府、大御所、県（顕）官とあるは幕府を指す。
6. 薩摩藩を薩藩と略称する所少なからず、観る人之を諒せられよ。

[薩摩博物学年表統合版凡例]

1. 本表は、別個に作成された上野版、長井版を統合することを基本目的とし、両版に記載されている事項毎に年代別に統合、整序したものである。各事項には通し番号を割り当てている。
2. 表に上野、長井の欄を設け、事項毎に記載があるものに○を付した。基本的に長井版と同じ内容である内藤版については内容上の異同がある場合に注記するにとどめた。
3. 上野、長井両版の年表に共通して記載されている事項については上野版の記述を掲載した。内容上、相補う、あるいは異同がある場合には「【長】～」の形で長井版の記述も併記した。また、長井版の記述について、内藤版により追補した箇所は〔 〕で括り、字句の異同を示す場合は（内：）とした。また、内藤版により訂正した箇所は（長：）として長井版の字句を記した。その他の統合作業にかかる注記は（※～）の形で記した。
4. 事項欄の記述については長井版の歴史的仮名遣いを含め原則として原文をそのまま掲載した。但し、明らかな誤字などについて修正した箇所もあるほか、検索の便を考慮し、旧漢字や一部地名については表記を改めた。
5. 内藤版のみにある備考欄の記載については「《備考》～」として事項の末尾に記した。
6. 編年について、上野版、長井版にある干支年は省略した。また、月が明記されていない事項については、元の年表の順序から時系列がわかるものは時系列の順に配列し、不明なものはその年の最後に配列した。両版に時系列不明な事項がある場合は上野版の事項を先に配列した。

4.　薩摩博物学年表統合版

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
1		○	1193	建久 4	源頼朝、其長庶子忠久を以て薩隅日三州の守護職に任じ、姓島津氏及び十文字紋を賜はる。島津家の高祖なり。《備考》富士野の巻狩、曽我兄弟仇討。
2		○	1194	建久 5	10 月、本田左衛門尉貞親、瀬崎野（下出水村）に馬牧を設けて牝馬を放つ。島津家三州に馬牧を設置するの初なり。
3		○	1222	貞応 1	4 月、幕府犬追物を南庭に見る。駿河前司義村検見、島津道仏公（第二代定時）申次。（※内藤は「道仏公（第二代定時）」のように諡号に括弧内にて世次及び名を補う。以下同様）
4		○	1342–1344	康永年間	種子島野牧始まる。《備考》三年六月、征西将軍懐良親王島津貞久を薩摩に破り給ふ。
5		○	1368	貞治 7	寄田野牧を新田八幡大宮司執印左衛門大夫友雄に賜ふ。《備考》後村上天皇崩御、長慶天皇践祚。
6		○	1393	明徳 4	6 月、島津恕翁公（第七代元久）幕府に書を上り、且つ酒匂新左衛門を遣して虎皮 3 枚、豹皮 2 枚、梅画 4 幅、料足 1 万匹を献ず。
7		○	1406	応永 13	島津公（第七代元久）人を遣し、朝鮮太宗の時、礼物を献じ被虜を発還し蘇木百斤を徳寿官に献ず。
8		○	1410	応永 17	島津恕翁公、幕府に白縅甲、鞍馬驢馬、太刀、絹布、皮革、蛮酒、砂糖を献じ、大弟義嗣公に太刀、毛氈、麝香其他を献ず。
9		○	1423	応永 30	島津久豊公（第八代）、人を遣し朝鮮世宗に土物を献ず、硫黄 3000 石、太刀 10 柄、金 1 段、犀角 2 本、白檀秀 10 觔、沈香 10 觔、甘草 1 觔、蘇木 1000 觔、扇子 20 本なり。不腆土宜綿布 540 匹を同人に以付す。
10		○	1424	応永 31	島津公、朝鮮世宗に人を遣し硫黄 3000 觔、丹木 500 斤、漆 35 斤、太刀 5 柄を献ず。正布 268 匹、同人に以付す。《備考》此の年飢疫あり、人多く死し、「往」々挙村無人に至る。
11		○	1426	応永 33	2 月、島津公、犬追物を献ず。此後しばしば犬追物行はる。以後略す。
12		○	1471	文明 3	9 月、桜島黒神村神火燃ゆ。
13		○	1475	文明 7	8 月、桜島野尻村神火燃ゆ。
14		○	1476	文明 8	9 月 11 日、桜島地震、12 日発火、石裂け岩崩る。人畜を圧殺し地踊り出て海中に出づ、広さ二里所、島と合して一つとなる。
15		○	1532	天文 1	薩摩士野村良昌、琉球より孟宗竹、楊柳、夾竹桃、唐垂竹を持ち帰れりといふ。
16		○	1540	天文 9	島津日新公、加世田征伐の祈願成就の謝恩の意を以て、伊作野牧を創設し、金峰山に額を奉納す。
17	○	○	1543	天文 12	8 月、ポルトガル船、種子島に来航、領主種子島時尭、鉄砲を譲り受け、砲術を習う。
18		○	1543	天文 12	鉄砲伝来の時、南蛮人の賈人アラビヤ馬を種子島に輸入したれば、島津氏更に之をとりて指宿に上陸せしめ、吉野牧に入れたりといふ。
19	○		1549	天文 18	7 月、フランシスコ・ザヴィエル、鹿児島に来着、キリスト教を伝える。
20		○	1551	天文 20	大永 7 年（1527 年）兵火に罹りたる国分八幡宮の再建造営を企画す。［永禄 3 年（1560）竣工、遷座始る］此造営中、霊夢により 1 月 18 日を例祭とし、此際馬に盛装せしめ且つ玉鈴を着けしめたること、現今の鈴懸馬の濫觴なりといふ。
21		○	1566	永禄 9	9 月 9 日霧島山噴出す。燃焼して人多く焼死す。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
22		○	1568	永禄 11	薩摩郡入来村の長野牧創始さる。
23		○	1571	元亀 2	川辺郡神殿に金銀銅山を発見し、発掘盛んなり。《備考》三月、大村純忠長崎をポルトガル人に開く。六月、毛利元就、島津貴久公卒す。九月、信長叡山を焼く。
24		○	1576	天正 4	6 月、近衛前久鹿児島を発す。島津忠良公、茶入、琉球莚、沈香、蘇木、止宇寸、精綿其他を献ず。《備考》二月、信長安土城に移る。
25		○	1577	天正 5	琉球王、天界寺修翁和尚を遣し、書をもたらしめ来聘す。島津公に黄金 3 枚、蘇木 1000 斤、絹子 20 端、蠶綿 50 把、紅泉 6 斤、唐焼酎、老酒其他を献ず。
26		○	1580	天正 8	福山野に馬牧を創始す。
27		○	1584	天正 12	桜島嶽牧復興。《備考》秀吉比叡山を再興す。大村有馬の使羅馬に入る。
28		○	1585	天正 13	島津公、幕府に黄金 100 両、馬 3 疋、鷹 1 連を献上す。上井覚兼、島津氏久公著はすところの馬書の写本を作る。琉球王、使を遣し、香 7 品、唐墨 2 錠、唐紙 200 枚、碧蠶糸 50 把、紅花 100 斤、食盒 1 枚等を島津公に献ず。《備考》秀吉南蛮寺を毀つ。
29		○	1589	天正 17	1 月、島津公、関白公に鉄砲雁 20、鴨 50 を献ず。《備考》五月、秀吉使を琉球に遣す。
30		○	1595	文禄 4	3 月 10 日島津義弘公豊臣秀吉の朝鮮征伐に従軍し朝鮮昌原に猟をなし虎 3 匹を殺す。
31		○	1596	慶長 1	初めて煙草の種子を得、薩摩国揖宿郡指宿の里に栽植す。日本煙草栽培の濫觴なり。（薩摩煙草録）
32	○	○	1598	慶長 3	10 月朔日、豊臣秀吉出兵の朝鮮の役終り、島津義弘帰還に当り、ウシウマを連れ帰る。鹿児島で飼育、のち吉野牧に移す。 【長】（※ 1599 年のこととして）島津義弘公朝鮮征伐より帰るに及び韓土の奇獣ウシウマ 10 数頭を携へ帰り鹿児島城内厩に飼養す。同時に朝鮮より蜂飼を従え帰り、後、加治木の旧城大手口の阪下一反余歩の地を与え、蜜蜂飼養場を設けしむ。人呼んで蜂飼市左衛門といへり。又朝鮮名医金徳捕虜となりて薩摩に来る。此時帰化人二十人余姓を連れ帰りしが、此等の中、金海、及朴平意は島津公の好遇に報いんため日置郡伊集院村苗代川及〔姶良郡〕帖佐村に居住して其職業なる製陶（長：陶製）の業を始む。薩摩焼の濫觴なりとす）《備考》閏三月、前田利家薨ず。五月、長曽我部元親卒す。六月、島津忠恒高野山供養碑建立。
33		○	1602	慶長 7	島津公、徳川家康公（神祖）に硫黄 1000 斤、砂糖 1 槽を献ず。
34		○	1603	慶長 8	島津家久公、徳川家康公に砂糖、沈香（10 斤）、伽羅（3 斤）、段子（10 巻）を献じ、徳川秀頼公に豹皮 2 枚、伽羅等を献ず。
35		○	1603	慶長 8	冬初めて向島蜜柑を徳川家康公に献ず。此後屢々向島蜜柑を徳川家康公に献ず。以後略す。（向島は桜島のことなり）。《備考》二月、家康征夷大将軍に任ぜらる。三月、小笠原為信初めて長崎奉行となる。四月、秀頼内大臣に任ぜらる。九月、曽呂利新左衛門歿す。
36	○		1605	慶長 10	野間総管、閩よりむんす芋（蕃薯）を沖縄島へ持ち帰る。（※『薩藩の文化』によれば、これに先んじて 1597 年に甘藷（蕃薯）が中国より宮古島に入ったという（鹿児島市 1935: 185））
37		○	1605	慶長 10	島津義弘公病む。前将軍、祐乗坊をしてこれを医せしむ。砂糖 500 斤を献じ謝せしむ。
38		○	1606	慶長 11	服部左衛門宗重、島津義久公の許可を得、煙草を国分梅木の地一反歩に試植す。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
39		○	1608	慶長 13	島津公、神祖に砂糖 2000 斤、蘭 2 本、竜眼菓子を献ず。
40	○	○	1609	慶長 14	3 月、島津家久、琉球攻略を開始、4 月首里を手中に収め、琉球国王尚寧を捕虜として 5 月鹿児島に凱旋。 【長】島津家久公、徳川家康公の命により琉球を征す。打手の大将樺山権左衛門久高、誓願の旨趣あり、帰朝の後、官に申して佐多山崎村に佐多の御崎権現社を移し再建せり。彼は琉球より持参せる蘇鉄を華表の左右に植ゆ。後、年々繁殖して全山数万株となる。
41	○		1609	慶長 14	5 月、琉球従軍の喜入領主肝付兼篤、凱旋に際しノヒルギを持ち帰り、喜入海岸に植えるという（口碑）。
42	○	○	1609	慶長 14	12 月 26 日、島津家久、駿府の徳川家康に謁し琉球の仏桑花を献ず。 【長】島津公、徳川公に虎皮 5 枚、熊皮 10 枚、焼酎 2 壷を献ず。又螺填屏風、仏桑花 1 本、茉莉花 1 本、硫黄 1000 斤、象牙、南蛮鉄砲等を献ず。
43		○	1609	慶長 14	大島の直川智、琉球に航せんとして、たまたま颶風に遭ひ、閔（ママ）に漂着し、其の地に滞在して甘蔗栽培法及び砂糖製造法を習得す。（奄美大島の糖業）
44	○	○	1610	慶長 15	奄美大島大和村の直川智（すなおかわち）、閩より甘蔗苗 3 本を持ち帰り育てる。それによってやがて黒糖百斤を得たという。 【長】直川智蔗苗を携え帰り之を大島大和浜大金久村字西浜の地に植え、黒糖凡そ百斤を得たり。是本邦に於ける糖業の初めなり（同上）
45		○	1610	慶長 15	9 月、安南国入貢し薩摩浦に着す。沈香の柱 12 本、（1 本につき 4 人持）、沈香彩木 1 本、糖水十壷、沈香 10 升（是は上の沈香なり）、象牙 2 枚、鸚鵡 1、孔雀 1、リンケイ（鳥名）、紋絹 2 疋を献ず。
46	○		1611	慶長 16	10 月、沖縄駐留の薩軍将士の帰還に際し、琉球王甘藷を土産として贈る。
47		○	1612	慶長 17	幕府全国に煙草を吸うこと、並びに売買耕作を禁ず。
48		○	1612–1613	慶長 17、18	甘藷、呂宋より薩摩唐湊（現今の鹿児島市隣接地西武田村の一字）に入る。（※内藤版は唐湊の位置を「川辺郡坊之津の地」とする）
49		○	1614	慶長 19	島津家久公、琉球産仏桑花及び茉莉花を徳川家康に献ず。
50		○	1615	元和 1	9 月全国に令して煙草を厳禁す（慶延略記）。（※内藤版に無し）
51		○	1616	元和 2	10 月幕府全国に令して煙草の耕作を禁ず（同上）。
52		○	1616	元和 2	11 月島津義弘公鷹を谷山に放つ。
53		○	1617	元和 3	薩摩より陶工高麗人張献功、一官（長：宮）三官を琉球に遣して其の技術を伝へしむ。（琉球陶工の起源）。
54		○	1617	元和 3	4 月 2 日琉球王の使者、薄芭蕉布 20 端、油槽 2 個、焼酎 5 壷、赤苧布 5 端、銀台等を島津義弘公に献ず。
55		○	1617	元和 3	冬、島津義弘公、花毛氈 10 枚、硫黄 3000 斤を将軍に献ず。
56		○	1619	元和 5	5 月天下に令して煙草の培養及び売買を禁ず。
57		○	1619	元和 5	島津家久公、硫黄、磁器、中山焼酎、熨斗鮑を将軍に献ず。
58	○		1623	元和 9	儀間真常、明へ行く施設の部下に、福州にて製糖法を習得するよう依頼する。その結果は沖縄製糖の始。
59		○	1623	元和 9	7 月 10 日蛮船、山川に到る。船中錦襴、白糸、白砂糖、黒砂糖を載す。60 余日山川に止る。
60		○	1624	寛永 1	甘藷薩摩より長崎に入る。
61		○	1627	寛永 4	2 月種子島弾正伊時、帖左に来り義弘公の膝突栗毛の事跡の煙滅せんことを恐れて、史官田中五右衛門国明に嘱して文を草せしめ碑を立つ。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
62		○	1627	寛永 4	秋小蝿といふ蟲田に入る。
63		○	1631	寛永 8	大御所、永井監物を遣し、島津公に駿河蜜柑を賜ふ。
64		○	1633	寛永 10	10 月 8 日大家、家老を遣し島津公に鹿 1 頭を賜る。
65		○	1634	寛永 11	蜂飼市左衛門士格に列せられ、小川姓を許され鹿児島に移住す。
66		○	1639	寛永 16	海内大飢饉死者道路に充つ。島津光久公入朝して襲封後、謁を賜ひ馬一匹を賜ふ。国に帰るに馬を賜ふことこれに始る。（※内藤版に無し）
67		○	1640	寛永 17	大家、島津光久公に御鷹の鶴（鷹の捕へたる鶴）を賜ふ。襲封後国に帰れば御鷹の鶴を賜ふこと之に始る。（此後屢々御鷹の鶴、雁鶉、雲雀等を賜はる。以後略す。）（※内藤版に無し）
68		○	1640	寛永 17	3 月山内与右衛門、薩摩郡永野村の渓谷にて金鉱を発見す。金場を大府に請ひ横川に立つ、其後国中に試み、芹ヶ野に金出づ。之より衆をして之を掘らしむ。
69		○	1640	寛永 17	此年諸国牛疫流行す。
70		○	1641	寛永 18	薩藩主砂金 1000 両を大府に献じ且つ長野（内：永野、以下同様）金場を献ずることを請ふ。
71		○	1642	寛永 19	1 月 14 日、長野金山御領となる。
72		○	1642	寛永 19	3 月 7 日、向島（桜島のこと）神火燃ゆ。
73		○	1642	寛永 19	島津寛陽公、金場の得る所の砂金 40 貫を献ぜんことを請ふ、県官受けず、之を還賜す、乃ち棒 3000 両を献じ恩を謝す。
74		○	1643	寛永 20	長野金山発掘停止さる。
75		○	1624–1643	寛永年間	琉球より西瓜薩摩に渡来す。（※内藤は 1627 年に繫年）
76	○		1644	正保 1	明が滅び清建つ。清、世祖の順治 1 年。
77	○		1644	正保 1	10 月 14 日、儀間真常親方歿、年 88（1552–1644）。唐名麻平衡、野間総管が福建から持ち帰った甘藷を植えひろめる。また製糖を始める。（1605、1623 参照）
78		○	1644	正保 1	異国船薩摩桜島に漂着し、其の船を修繕する間に、土人に黄櫨の種子を与え小河の地に植えしめ、実を取りて蝋をとることを教ゆ。（※内藤版は「（薩藩の文化二〇〇頁参照）」と記す。）
79	○	○	1645	正保 2	アカネ科のサンダンカ（長・内：三段花）琉球から薩摩へ渡る。
80		○	1645	正保 2	幕府諸国に命じ山林の濫伐を禁ず。（※内藤版に無し）
81		○	1646	正保 3	頃歳薩洲侯、枳殻の生本を唐山に得て、之を属島長島に栽培し其の成長して結実するを待つて、播種法又は接換法に依つて多数の苗木を作り、之を封内瀕海の暖地に移植せしむ。此木後年成長して多数の果実を産す。因つて海内の諸洲に貨売し一大国産をなす。
82		○	1647	正保 4	大和国吉野郡の民、大隅屋久島の杉苗を求めて、之を郡中に播種す。
83		○	1649	慶安 2	薩洲侯、大隅地図、日向地図、琉球城図成る、各一帳を使を遣し井上筑後守に付して将軍に上る。8 月 5 日薩摩地図、琉球地図、大島地図、八重山地図成各二帳及び日隅薩図用帳 6 冊、路程帳 3 冊、琉球図田帳、路程帳各 1 冊を大府に上る。
84		○	1656	明暦 2	6 月 26 日、将軍、島津綱久公の請を許して、領内各地の金山を鑿たしむ。之より長野、山ヶ野両金山あり。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
85		○	1658	万治 1	垂水家第7代島津玄蕃頭久浩、羊を海瀉村小浜の原野に放畜す。後、天明年中、桜島炎上のため、牧羊困難となり、海浜の海上江の島に移す。
86	○	○	1658	万治 1	9 月 29 日、明の帰化人何欽吉、都之城で歿す。広東海県の人、医を業とす。人参を発見、鬚人参を製して薬用とする。世人薩摩人参という。 【長】9 月 29 日明人何欽吉死す、彼は明末の乱をのがれて、内の浦に来り、帰化し医道を業とす。彼は梶山の山中にて和人参（薩摩人参）を発見せしものなり。
87		○	1658	万治 1	宇宿村の農民採樵して、錫鉱を得たり。之より谷山郡福本村の錫坑起れり。
88		○	1659	万治 2	春、庄内都城より高城、山之口、勝岡の通路に並松を植う。
89		○	1659	万治 2	薩洲侯、均田令数条を下す。
90	○	○	1659	万治 2	薩摩山川郷福元に龍眼樹を植えつける。また、巴豆（ハズ）も植える。山川薬園の起原。 【長】此頃山川郷福元に龍眼山を作り、龍眼、荔枝、巴豆、枳殻其他薬草木を栽植し御薬園を建設す。御薬園坪数約 5、6 反歩、現在の山川小学校校庭は御薬園の跡にして、龍眼（内：「二株、インドゴムノキ大木」と追記）の古木を存す。
91		○	1660	万治 3	大老の命を受け串木野、芹ヶ野金山を初めて採掘す。
92		○	1658–1660	万治年中	島津光久、阿久根母子島に鹿を放つ。
93		○	1662	寛文 2	8 月垂水の小喜田三八、四国阿波徳島より、甘蔗の種子を得て垂水村市来に栽培せり。之垂水砂糖の起源なり。
94		○	1666	寛文 6	長島大嶽野牧創始。
95		○	1666	寛文 6	海内諸国淡竹開花多く枯死す。
96		○	1667	寛文 7	3 月島津光久公、庄内高城、去酉年、狩倉、猪鹿 73 丸を猟す。（※内藤版に無し）
97		○	1661-1667	寛文年中	藤堂和泉守、キリシマツツジ（映山紅）を霧島山より取り寄せ秘蔵し、後多く取り寄せ染井の下屋敷に栽植す。
98		○	1675	延宝 3	8 月天下に令して本田畑に煙草培養すべからずの旧令を復す。（※内藤版に無し）
99	○	○	1683	天和 3	第 20 代藩主島津綱貴、かねて吉野牧に飼育中のウシウマを、種子島領主種子島久時に与え、同島内で飼育させる。 【長】6 月島津綱貴公、種子島の風土のウシウマに適すればとて、島主種子島久時に、残存せる 5 頭を賜ひ、久時は特に住吉村安城に芦野牧を新設し放飼せり。
100		○	1683	天和 3	薩摩朝議して、初めて鹿籠の金山を開き鉱石を掘り、黄金となさしむ。此山周囲 1 里 20 余町、芹ヶ野金山の金鉱乏しくなるに及び、同所の衆を鹿籠に移す。
101		○	1681–1683	天和年中	美人蕉琉球より輸入さる。
102		○	1686	貞享 3	11 月下郡元、脇田、谷山迄白貝多く出づ。
103	○	○	1687	貞享 4	新納又左衛門時升、龍眼樹を藩主に献ず。よって、佐多伊座敷に地を相して植えつける。龍眼山と称し、佐多薬園のはじまり。 【長】2 月 8 日新納時升の藩主に献上せる龍眼樹を平田清右衛門取次にて佐多村伊座敷の地に栽植す。
104		○	1688	元禄 1	藩公一般農民に蠶の飼方仰付けらる。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
105		○	1688	元禄 1	川辺郡野崎村、清水村、神殿村に鉄の試掘旺んなり。
106		○	1689	元禄 2	5 月 15 日琉球国より水牛 2 頭を島津公に献ず。山川より鹿児島に届き、御厩の池中に放つ。
107		○	1690	元禄 3	6 月 18 日霧島山噴出す。降灰数日。
108		○	1693	元禄 6	6 月頴娃牧、唐松野牧創始。
109		○	1694	元禄 7	島津貫陽公病あり。医を幕府に求む。幕府橘隆庵を薩摩に遣し医せしむ。験あり（※内藤版には「験あり」の句なし）。9 月 5 日隆庵鹿児島を発す。
110		○	1698	元禄 11	大府より金銀銅山を試むべきの命あり。是より再び芹ヶ野、河辺神殿山を掘り金許多を得、既にして止む。
111	○	○	1698	元禄 11	3 月、琉球国王尚貞、甘藷一籠を種子島領主久基に贈る。よって、久基それを同島石寺野に植えさせる。 【長】琉球より甘藷の種苗を薩州種子島の領主島津久基に贈る。久基、家老西村権右衛門時乗をして、之を同島石寺野の地に栽へしむ。之我国に於ける甘藷栽培の始めなり。
112		○	1698	元禄 11	彌寝清雄、吉利及び宦邑頴娃に命じて櫨を植へしめ頗る利あり、又肝付氏に勧めて其邑に植へしむ。肝付氏之を利とし桜島に種す。
113		○	1702	元禄 15	薩侯使を遣し、薩隅日琉球地図 12 帳を評定所に上る。
114		○	1687–1703	元禄年間	清国福州の船、阿久根に漂着す。船長謝文旦、唐通事、原田喜右衛門へ文旦の苗木を献ず（先人の遺沢）。（※内藤版に「（先人の遺沢）」の記載なし）
115		○	1704	宝永 1	1 月島津綱貴公、大隅国巡見の帰途、桜島湯の浦に於て鹿 3 頭を猟す。
116	○	○	1705	宝永 2	薩摩国頴娃郡大山村岡兒ヶ水の漁師利右衛門琉球より甘藷を持ち帰り、植えひろめる。 【長】揖宿郡山川郷兒ヶ水の漁夫前田利右衛門、琉球に航し甘藷数顆を携へ帰り、之を郷里に試植し其繁殖を待ちて之を闔村にわかつ
117		○	1713	正徳 3	下見吉十郎（甘藷地蔵）薩摩伊集院より伊予大三島に甘藷を移植す。
118		○	1713	正徳 3	薩摩より初めて大阪市場に琉球産黒砂糖を輸出す。其状宛も炭団の如く之を丸玉と称す。
119		○	1715	正徳 5	原田三郎右衛門（甘藷翁）薩摩より甘藷を対馬に移植す。
120		○		享保以前	正確なる記録なきも薩摩鰹節の起源は屋久島の古老に依れば享保以前ならんといふ（さつまぶし）。
121		○	1716	享保 1	2 月 18 日霧島山大燃初まる。12 月 16 日霧島復火を発す。降灰 4 日、高原、高城、都城、小林、須木、野尻、高岡等田畴皆埋まる。此時牛馬多く死す。
122		○	1717	享保 2	1 月 3 日、霧島火を発す。7 月又噴火し連日止まず。
123	○		1718	享保 3	清、康熙 57 年、琉球への冊封副使徐葆光、帰清後『中山傳信録』を著わす。
124	○	○	1719	享保 4	7 月 5 日、岡兒ヶ水の利右衛門、海上にて遭難水死。墓は岡兒ヶ水にあり、墓表に「一翁祖元居士」。 【長】7 月 5 日（内：7 日）、前田利右衛門今年再び遠く出漁し、山川附近に於て難船、海門岳の見ゆる所にて溺死す。郷人其生前の徳に感じ、山川町岡兒ヶ水に甘藷翁碑を立て徳光神社に奉祀す。
125		○	1721	享保 6	7 月 5 日、伊豆の代官川原清兵衛、龍眼樹 2 株を伊豆の大島に植ゆ。10 月更に龍眼樹 2 株、荔枝 3 株を大島に植へ薩摩龍眼肉種子 1 袋、長崎龍眼肉種子 1 袋を播種す。種子発芽せず。生樹枯死す。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
126		○	1725	享保 10	太田五郎右衛門、江戸に使して白鵰を得て帰り藩公に献ず。公之を愛姫お元に賜ふ。
127		○	1725	享保 10	5 月 28 日より 6 月 21 日の間、大磯附近の狐狩をなす。狐 6、狸、兎各々 2、猪、鹿各々 1、山鱆といふもの 1 を得たり
128		○	1727	享保 12	将軍徳川吉宗、甘蔗苗を琉球より取り寄せ、薩人落合孫右衛門を召して浜及び吹上の園中に成植せしむ。
129		○	1728	享保 13	4 月笹実熟す、此年大飢饉にして之にて命をつなぐ所あり。
130		○	1729	享保 14	9 月琉球人、唐より火無くして塩を採る方法を稽古したる事を藩府に申し出づ。鹿児島塩屋にて稽古を仰付けらる。
131		○	1732	享保 17	天下大飢饉あれども、三州は甘藷あるを以て死する者少し。藩公家鴨の卵を鶏に抱かし孵化せしめ其の首尾を届けしむ。
132		○	1733	享保 18	井戸正明（甘藷代官）薩摩より甘藷を石見国大森に移植す。
133	○		1734	享保 19	3 月、「諸国へ産物お尋ね」触書。
134		○	1734	享保 19	幕府、青木文蔵に命じ甘藷の種子を薩摩より徴し、小石川養生所（今の植物園）170 坪の地に諸種 181 顆を試植し、5651 顆を収穫せり。
135	○		1735	享保 20	諸国へ産物お尋ねを実行に移す。総裁丹羽正伯（貞機）。
136		○	1716–1735	享保年間	富山売薬（反魂丹）を薩摩内にて行商する事を許可す。
137	○	○	1736	元文 1	5 月、第 21 代藩主島津吉貴の申入れにより、琉球より江南竹 2 株を鹿児島に渡す。これを磯庭園内に植える。のちにこの竹を国字で孟宗竹と名付ける。【長】3 月、島津吉貴公、江南竹 20 株を琉球に求む。5 月琉球より 2 株を献じて曰く、「頃歳之を漢土に得て未だ藩衍せず、因つて数に充つるを得ず」と。之を磯別邸に植ゆ。之れを九州以北に普及せる発祥地となす。
138		○	1736	元文 1	大島、徳之島地方に天然痘流行し死するもの多く、予防法なし、悪疫払いの踊をなす。
139		○	1736	元文 1	4 月、将軍吉宗駅路の鈴の形を知らんと欲し、之を林家及び神祇官白川従二位雅光等に尋ね問へども詳ならず、依つて広く海内に尋問せしに、鹿児島神宮の大宮司同社前の宝の箱の中に鈴明神と尊崇せる神体即ち古代の駅鈴なるを発見し、其の形状を模写して之を将軍に献ぜり。
140	○	○	1737	元文 2	9 月 8 日、薩摩藩、『薩摩国産物絵図帳』ほかを「産物お尋ね」総裁丹羽正伯に提出。それらは薩摩大隅日向諸縣郡産物惣本帳 3 冊、同上絵図帳春夏之部 5 冊（うち 3 冊薩摩）で、秋冬之部はのちに提出。 【長】加賀国、稲生若水、庶物類纂を編輯し、未だ成らずして死す。県官其の遺稿を得て丹羽正伯に命じ之を補成せしむ。諸国に移文して其の土に産する物をうつして之を正伯に致さしむ。7 月 8 日、薩摩公、薩摩、大隅県郡産物図説を丹羽正伯に致す。且ついふ、今日図説は春夏の部に止まり、秋冬の部は次いで上進すべしと。"
141		○	1738	元文 3	5 月 5 日、土産図説、秋冬の部成り薩摩より至る、薩侯、留守居を遣はして之を丹羽正伯に致す。
142		○	1740	元文 5	オランダ人水漉石を幕府に献ず。依つて海内諸国に命じて日本にも産するやを調査せしめしに、伊豆みづみかげ、薩州岩石、つつ石、遠州、浅隅石、之と同物なるを発見せり。
143		○		元文以後	八丈島に薩摩より甘藷を移植す。
144		○	1742	寛保 2	幕府、諸国に命じて森林を伐採し開墾することを禁ず。（※内藤版に無し）

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
145		○	1743	寛保 3	11 月、彗星夜に入る頃より 5 つ時分まで見ゆ。（※内藤版に無し）
146		○	1744	延享 1	8 月、大地震、10 日大風、毛降る。
147		○	1744	延享 1	冬月薩州硫黄島の洋中に於て亀竜 1 頭を得て藩府に致す。
148		○	1745	延享 2	9 月 26 日薩侯、将軍に塩鶴、鯣、昆布樽を献ず。
149	○		1745	延享 2	11 月 6 日、島津重豪、鹿児島で生まれる。初名久方、のち忠洪。
150		○	1746	延享 3	南泉院、南林寺諸所の松に虫つく。故に 24 人の百姓、虫踊をなす。
151		○	1753	宝暦 3	薩侯、木曽川治水の命を受く。家老及び諸有司を遣して役せしむ。
152	○		1755	宝暦 5	7 月 27 日、重豪、父島津重年の遺領を継ぎ、25 代薩摩藩主となる。
153		○	1756	宝暦 6	4 月 5 日幕府、国目付京極高主（兵部）青山親七右衛門薩摩に到る。記録奉行吉田清純等編する所の地誌要略 2 冊を呈す。
154	○		1758	宝暦 8	曾槃、江戸で生まれる。
155	○		1762	宝暦 12	8 月 5 日、白尾国柱、鹿児島で生まれる。
156		○	1751–1763	宝暦年中	クサアダン（※蘆薈、アロエ）琉球より輸入さる。
157		○	1751–1771	宝暦、明和の頃	出水郡阿久根大同寺の住職芳円、城州宇治興正寺に寓居し宇治茶の製法を受けて帰郷す。
158		○	1751–1771	宝暦、明和の頃	薩藩家老菱刈実詮建議して、佐多郷薬園創始さる。
159	○		1766	明和 3	清、乾隆 31 年、徐葆光著『中山傳信録』刊。この書が載せる琉球の産物（動植物）は、薩摩博物学の発達に大きい影響を及ぼした。
160		○	1766	明和 3	大沢権右衛門（甘藷翁（オイモヂイサン））薩摩より甘藷 3 個を静岡県榛原郡御前崎村に移植す。
161	○		1767	明和 4	2 月 2 日、木村探元、鹿児島で歿する、年 89、画家。金左衛門、藩主吉貴から探元、京都の近衛家久から大貳の名を貰う。花鳥画をよくし、琉球植物の絵を残す。
162	○		1767	明和 4	南山老人（重豪）著『南山俗語考』成る。中国南部の俗語を集め、音韻を正し邦訳をつけ、自らの備忘とする（1812 参照）
163		○	1767	明和 4	徳之島に疱瘡流行す。
164	○		1768	明和 5	10 月、薩藩の命で、琉球に産物取調奉行を置き、各島の「諸蟲草木葛竹」を採集させる。採集諸品は明和 6、7 年に薩藩に納めさせる。
165	○		1769	明和 6	田村藍水著『中山傳信録物産考』3 巻成る。
166	○	○	1770	明和 7	4 月、島津重豪、琉球植物の標本 10 櫃を田村藍水に下賜する。
167	○	○	1770	明和 7	8 月、田村藍水著『琉球産物志』15 巻同附録成る。邦人によって作られた琉球植物誌のはじめ。 【長】（※ 1771 年のこととして）江戸の医師、本草学者田村元雄の篤学に感じ、島津重豪公、琉球諸島の産物 1000 余種を贈る。元雄大ひに喜び、琉球産物誌 15 巻附録 3 巻を著し其の図説を作る。
168	○		1771	明和 8	島津重豪、27 歳、幕府の許可を受け、江戸から帰薩の途中、長崎へ赴き海外から渡来の文物を実見する。
169		○	1764–1771	明和年中	琉球産ガジュツ（※莪朮）薩摩より上る。京師浪花の人々競ひ栽植するも皆越冬せずして枯る。此頃キヤウワウ（※薑黄）琉球より入る。
170		○	1772	安永 1	2 年 5 月迄徳之島全島に一種の疫病流行す。全島老若男女一人として煩はざるなく死者千余人なり。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
171	○		1773	安永 2	薩藩の阿野道恕、東都田村藍水に入門、本草学を修む。学成らずして江戸で客死。
172		○	1773	安永 2	洋舶、豪猪を薩摩に伝へたるもの此年春大阪に来り観物とす。
173		○	1773	安永 2	徳之島稲作に虫害あり。種子籾に困難を来し、飢饉に陥り、米 800 石を借りて危地をまぬかる。
174		○	1773	安永 2	8 月 29 日、薩黌造士館及び演武館を創立す。
175		○	1774	安永 3	3 月 14 日、島津重豪公、坂本村造士館と斜に相対して、医学院を建て、翌月学規を定め、医道の研究を命ず。之と同時に神農廟を医学院の左側に立て、唐土上古の君、炎帝神氏を奉祀す。
176	○		1776	安永 5	3 月 25 日、田村藍水歿する。年 59、浅草真龍寺に葬る。名元雄。
177		○	1776–1777	安永 5、6	薩州知覧の人、仲覚兵衛骨粉を農事に用ふる事を発見す。
178		○	1777	安永 6	大島地方に初めて煙草流行し笠利間切に多く之を植ゆ。時の代官之を藩庁に上申し、煙草作を禁ぜり。
179		○	1778	安永 7	海内諸国、淡竹林に病付き多く枯死す。
180		○	1778	安永 7	琉球人新垣筑兵衛、島津重豪公より帰化を命ぜられ、彼が支那福州に於て伝授し来れる唐紙製造の業に従事す。
181		○	1779	安永 8	10 月朔日、桜島南方の山より大いに火を発す。死者 153 人、田畠の損失 2 万余石に及ぶ。
182		○	1779	安永 8	10 月 26 日島津重豪公造士館の東南、中福良に明治館を立つ。推歩測候及び露台等を備付く。
183	○	○	1779	安永 8	鹿児島府城の東北、吉野丘陵地上に吉野薬園を開く。 【長】吉野村大字帯迫の台地を拓いて薬園を開き（今の吉野小学校肯定）、諸種の薬草を栽植す。
184	○	○	1779	安永 8	江戸高輪の島津邸内に、磯の仙巌園の江南竹（孟宗竹）を分植する（1736 参照）。 【長】江戸品川の薩藩邸に琉球産孟宗竹の筍を初めて栽植す、世人之を珍賞す。
185	○	○	1780	安永 9	薩藩薬園署開設、阿野道恕（1773 参照）の子元斎、薬園見習医師。（※『鹿児島市史』は 1781 頃とする。長井版は 1781 に繫年。また、『鹿児島市史』には、1783 年（天明 3）に薬園掛設置とある（鹿児島市史編さん委員会編 1969: 461））|
186	○	○	1781	天明 1	6 月、江戸青山の本草家佐藤成裕（滕成裕）、号中陵、島津重豪の委嘱によって薩摩に入り、藩内採薬。（※長井版は「今、薩州採薬録なる写本あり、編者、考ふるに彼中陵の著はせるものなるか、今之を詳にするあたはず、以後考を待つ」とする。内藤版には疑義のコメントなし）
187	○		1781	天明 1	薩摩薬園署、琉球の学士呉継志、字子善をして、琉球各島の植物を集めさせる。それらを標本や図画となし、あるいは鉢植生植物のまま、清国の学者に送って鑑定を求めることを続け、1785（天命 5 乙巳）に至る。呉継志は仮託の人名で、その人が居たのではない。
188	○		1782	天明 2	阿野元斎、東都田村西湖、名元長（藍水の長子）に入門、本草学を修め、蓼製法を習う。
189	○		1783	天明 3	1 月、京都の医橘南谿、西遊の途、鹿児島に来り、城下にジャコウネズミの夥しいのを目撃する。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
190	○	○	1783	天明 3	佐藤成裕、薩摩を辞して東都に帰る。のち、『薩州採薬録』、『薩州産物録』の著がある。 【長】本草学者佐藤中陵、母の疾あるを以て薩州を辞し帰る。薩侯大奥にてお鷹二据を拝領。
191	○	○	1784	天明 4	報歳蘭、琉球から薩摩に渡る。
192	○		1785	天明 5	1 月、阿野元斎帰鹿、人参製造法に熟達、のち御広敷医師に昇進。
193	○	○	1785	天明 5	薬園署編述の植物誌内篇 4 巻外篇 4 巻成り、『質問本草』と名付ける。彩色本。(1834 参照) 【長】(※ 1786 年のこととして) 薩侯、村田経韜に命じて琉球の学士、呉継子なる者をして、琉球山中及び其属島の奇花野草開花に至るまで採収させ、葉を腊し花を描せ、之を歳貢者に託して、天明元年辛丑より天明 5 年乙巳の年まで、各省の鴻医碩儒 45 人に就いて、その名称主療を質問せしむ。呉継子之を集録して内外篇八巻となし、天明六年薬園局に進呈す。質問本草之なり。
194	○	○	1785	天明 5	ワンピ(黄枇)琉球から薩摩に渡る。
195		○	1786	天明 6	11 月 18 日中山王より薩侯に龍延香 20 袋、縮緬 20 巻、芭蕉布 20 反、八重山海鼠 2 箱、泡盛 3 壷を献ず。
196	○		1787	天明 7	1 月 29 日、島津重豪隠居する、43 歳。
197		○	1787	天明 7	薩侯、渋江源蔵、新垣筑兵衛等をして、琉球の砂石草木鳥獣を調査せしむ。
198	○		1788	天明 8	曾槃、来日の清国蘇州府の薬材肆呂宏昭と、薬物についての問答を交わし、『呂宏昭薬品答』1 巻を作る。
199		○	1788	天明 8	渋江源蔵、新垣筑兵衛等琉球より帰国す。
200		○	1781–1788	天明年中	富山売薬一時差留あり。
201		○	1781–1788	天明年中	天明中薩摩に持ち来られたる鳥類は次の如し。駝鳥 3 羽、及び本国鳩、スタンエントウ(紅毛国→長崎→薩摩)ヤアルホウゴロ 1 羽、カアフスカナリヤ雄 2 羽(紅毛国→薩摩)、珍美鳥(琉球→薩摩)。
202		○	1789	寛政 1	合薬吟味役、上野新左衛門、御領内居付人といふ分にて、合薬商売を 16 人まで富山売薬業者に差許す指令出づ。之より売薬は我薩藩に入り、爾来年と共に田舎の隅々まで入れつけ越中といふ語は殆んど売薬の代名詞となるに至れり。
203	○	○	1790	寛政 2	琉球から巴豆(ハズ)の生本 1 株薩摩へ渡る。佐多薬園に移植する。 【長】琉球人、巴豆の活木 1 株を福建連紅県に得て之を薩摩に致す。
204		○	1790	寛政 2	徳之島天然痘大流行し 431 人死す。
205		○	1790	寛政 2	桜島火を発し巨石を飛ばし積巌を崩し、島民死するもの多し。
206		○	1791	寛政 3	牟礼野牧廃止さる。
207		○	1791	寛政 3	薩摩より日向那珂に甘蔗移植さる。
208	○	○	1792	寛政 4	曾槃、重豪の侍医兼記室(秘書)に採用され、薩藩臣となる。 【長】本草学者、医師曾占春、堀本蘇山の推奨に依り薩摩に来り、島津重豪公の記室となる。禄 15 口、金 30 両、薬 4 石を賜ふ。時に彼 32 才なり。参圃吉野御薬園中にあり。地に応ぜず。今年官園の参子を乞ひ、曾占春をして地を相せしめ、隅日諸山の中 20 箇所に植ゆ。歳毎に増へ 3 年を経て官製にならひ蒸製す。国用余り有り。種薬の園を閉づ。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
209	○	○	1792	寛政 4	3 月、重豪、新営の江戸高輪蓬山隠館に遷る。 【長】島津重豪公、江戸高輪に別野を営み、蓬山館と名づけ、西洋製の弄玉亭を擬造し大磐石の度景を安置し、葡萄架を設け花園を作り、之れに独楽園と名づけ、3 月 11 日ここに移転す。
210	○	○	1792	寛政 4	12 月、薩藩薬園奉行設けられ、御庭奉行大田筑左衛門用嵩、表御小姓村田藤之助常陶その職に補せられる。 【長】12 月初めて薩藩に御薬園奉行設けらる、御薬園奉行 5 人あり。
211		○	1793	寛政 5	4 月 19 日、薩摩の国より琉球のウサギ馬 2 疋を関東にひかしむ。
212		○	1793	寛政 5	7 月島津斉宣公、旧福昌寺内に君馬堂を設置せしめ、歴代各公の愛馬を歛む、山本正誼碑文を撰す。
213	○	○	1793	寛政 5	『成形實録』改め『成形図説』の編集に着手。 【長】9 月 3 日江戸芝邸に於て、曾占春、白尾国柱等と「成形図説」撰修の命を受く。（※上野版は白尾の参加は 1799 年のこととする）
214	○		1794	寛政 6	1 月、曾槃江戸を発ち、3 月薩摩に入り、藩内を踏査す。
215		○	1794	寛政 6	7 月曾占春薩摩より東都に帰る。秋 8 月曾占春農経講義上下 2 巻を著す。
216		○	1795	寛政 7	曾占春頃歳大隅に結実せし龍眼 3 顆を吉田篁墩に贈る。
217		○	1795	寛政 7	薩藩臣白尾国柱著麑藩名勝考成る。
218		○	1796	寛政 8	5 月曾占春、固定王の「救荒本草和訓灯」1 巻を作る。
219		○	1797	寛政 9	曾占春「無人島談話」3 巻を著し、八丈島の南方鳥島に漂着せる、薩摩舟人の談話を蒐録す。
220		○	1798	寛政 10	曾占春「本草綱目纂疏」20 巻を撰述す。
221		○	1798	寛政 10	島津斉宣公の母於智馬君は藩府にて蓮糸布を紝織せんことを計り、城池の蓮の繊維と蠶糸にて布を作り、1 丈 5 尺幅 9 寸のもの出来たり。
222	○		1799	寛政 11	9 月 3 日、藩臣白尾国柱、江戸へ召致され、『成形図説』修撰の命を受け、その業を始める。
223		○	1799	寛政 11	曾占春、渋江氏が蝦夷より採集し来れる所の草木腊葉を分類整理し、「蝦夷草木志料」1 巻を作る。
224	○		1800	寛政 12	佐藤成裕、水戸藩士となる。
225		○	1800	寛政 12	曾占春、立春前 1 日「本草綱目纂疏」20 巻修正の業成る。9 月春の七草 1 巻を上木す。
226	○		1800	寛政 12	11 月 14 日、島津重豪総髪となり、栄翁と称す。4 年後文化 1 年甲子 5 月 2 日剃髪。
227	○	○	1801	享和 1	重豪、曾槃に命じて荏原郡大崎村の別墅に種薬園を造らせ、数百の薬草木を植えつける。 【長】島津重豪公、曾占春に命じて、荏原郡大崎村の別墅に種薬園を作らしめ、秋 9 月薬草木を移植す。数百品全く集りて、山上の松林中に炎帝廟を創建し曾占春に命じて碑文を書かしむ。
228		○	1801	享和 1	琉球人福州より狼毒の生本を得て之を薩摩に将来す。
229	○		1802	享和 2	1 月 25 日、兼葭堂木村孔恭歿、年 67。大坂の富商坪井屋吉右衛門である。島津重豪から薩摩の虫類標本を下賜され、『薩摩州蟲品』（薩州蟲品）1 冊を作る。略画と土名とよりなる。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
230	○	○	1802	享和 2	10 月、重豪の鳥方役比野勘六の『鳥名集』成る。 【長】11 月薩摩の鳥方、比野勘六「鳥賞案子」成る。（此他彼の著には飼鳥必要 3 冊、鳥博士正続編、養禽物語等あり）。（※内藤版には「（此他彼の著には飼鳥必要 3 冊、鳥博士正続編、養禽物語等あり）」の記載無し）
231		○	1802	享和 2	徳之島の稲田に蝗虫大発生をなす、276 石余捕殺す。
232		○	1802	享和 2	琉球よりリウキウソケイを輸入す。
233		○	1803	享和 3	曾占春、「渚乃丹敷」2 巻を作り、介類を記述す。亦「人参培養法及び製造法」を記述し、又「烹茶樵書」を草し「本草綱目纂疏」3 巻を上木す。
234		○	1803	享和 3	8 月 10 日曾占春、島津重豪公の命により、村童より新鮮なる霊芝を求めて公に呈覧す。
235	○	○	1804	文化 1	11 月 1 日、『成形図説』巻 1-30 成、鹿児島藩蔵版。巻之一の巻頭に提要を載せる。 【長】島津重豪公、侍医曾占春、国学者白尾国柱、蘭学者堀愛生に命じて「成形図説」100 巻を撰述せしむ。此年 30 巻を上木す。1-14 巻、農事部、15-20 巻、五穀部、21-30 巻、蔬菜部なり。
236	○		1805	文化 2	5 月、『成形図説』1-20 巻を藩侯に呈出する。
237	○	○	1806	文化 3	3 月 4 日、高輪車町より出火し、芝の薩藩邸類焼、『成形図説』既成の版木 600 枚土蔵に封じて助かる。よって『図説』の編集を一時中止し、白尾国柱らは帰国する。 【長】3 月 4 日、江戸高輪泉岳寺門前より出火、市中大抵焼払はる。高輪薩州藩邸亦全焼す。此時薩摩蔵版「成形図説」の版木原稿共に烏有に帰す。依つて編輯局を廃し、同局員白尾国柱等を帰国せしめ、更に曾占春一人に命じて菌部以下を編輯せしむ。
238		○	1806	文化 3	曾占春、「海内方物紀略」1 巻を著し海内諸国著名の物産を列挙す。
239	○		1807	文化 4	『成形図説』編集再開。白尾国柱は国元から東都に来て加わる。
240	○		1808	文化 5	薩摩藩、奄美大島、徳之島、喜界島 3 島に、毎年一定数のアカヒゲ、尺八鳩を上納すべきことを命ずる。
241	○		1809	文化 6	9 月 28 日、島津斉彬、江戸で生まれる。
242		○	1809	文化 6	曾占春「占春斎魚品」3 巻を著はし、有鱗魚 81 種、無鱗魚 52 種、異魚 26 種を記載し和漢名を考証す。
243		○	1812	文化 9	島津重豪公、荏原郡大崎村、大井、白金三村の別墅に茶園を作らしめ、宇治山より好種を得て栽培し、三歳を経て清明穀雨の間に其頂芽を摘み、蒸焙して毎歳内宮へ奉進す、初めは曾占春其他之れに当る。
244		○	1812	文化 9	3 月 28 日、幕府測量方伊能解勘由等大隅国屋久島に上陸す。4 月 26 日種子島に到り 5 月 24 日帰朝す。
245		○	1812	文化 9	川辺郡竹島東方海上より同島に群鼠渡り飢饉に瀕す、7、8 年も留まり漸次減少す。
246	○		1812	文化 9	『南山俗語考』刊。（1767 参照）
247		○	1812	文化 9	曾占春、「水草識略」を作り水草 130 余種を記載す。
248	○		1813	文化 10	11 月 11 日、田原直助、鹿児島に生まれる。名明章、明治後には陶猗と称する。
249		○	1815	文化 12	国分煙草を江戸に販売することを公許せらる。
250		○	1815	文化 12	島津重豪公、橋口兼古に命じて薩藩の勝景百図及び図考を撰せしめ、2 月之れを幕府に上る。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
251		○	1815	文化 12	徳之島、天然痘大流行し、9672 人中 1891 人死亡す。
252		○	1815	文化 12	10 月曾占春武州荏原山荘にありて「橘黄閑記」30 巻の編輯に着手す。
253	○		1816	文化 13	ムラサキオモト、琉球から薩摩に渡る。(※長井版は 1830 のこととする)
254	○		1817	文化 14	4 月 13 日、木脇啓四郎、字祐業、薩摩士木脇祐長の長男として沖永良部島で生まれる。
255		○	1817	文化 14	薩州医学院の薬園生、医師渋江東徳大島山中にて、一種の香木を得て、その枝柯及び葉腊を携へかへり、之を東部に伝授し、曾占春をして審査せしむ、沈香なり。黒島に於て蕩竹結果し、一本より 5 合計りあり、其後枯死す。
256		○	1817	文化 14	同島海上より数十万の群鼠渡り来り、島中の穀物を喰ひつくし飢饉に及び、椎実、竹実艾、葉等を以て助命せり。此年幸に魚多く、之にて食を助けたり、群鼠は此年冬より次第に減少せり。
257		○	1817	文化 14	曾占春「薬荘討源」上下両巻を作る。
258		○	1801–1817	文化年中	藩公の命に依り津崎仁蔵、肝付郡佐多村伊座敷部落の鞍掛に茘枝を植ゆ、此の地は現在村山盛章氏の所有なり。(後天保年間茘枝 2 本を加植す)。
259		○	1818	文政 1	島津重豪公、国人に毛織の業を学ばしめんと欲し、坂元澄明等に緬羊の畜育及び毛織のことを官医渋江氏につき学ばしむ、坂元翌年帰国し羊毛紡織の業を開く。未だ緬羊の蕃殖多からざるを以て専ら畜養を主とせり。
260		○	1819	文政 2	甘蔗薩摩より天草に入る。
261	○		1821	文政 4	2 月 15 日、白尾国柱、鹿児島で歿する、年 60。
262		○	1821	文政 4	坊之津にて是迄製造せる鰹節は大抵半製（荒節）にて、鹿龍商人に売却せしが、坊村の製造家始めて大阪兵庫に輸出して新に販路開けたり。
263		○	1821	文政 4	曾占春「国史昆虫草木攷」12 巻を編述す。
264		○	1823	文政 6	琉球球より木柯咀呢の生木を輸入す。
265	○	○	1823	文政 6	8 月、曾槃の著『西洋草木韻箋』2 巻成る。また、同じ 8 月、同人の『西洋文物韻箋』2 巻成る。ともに、『成形図説』の編集に資するための用意だという。【長】8 月 16 日曾占春「成形図説」の志料として「西洋草木韻箋」上下 2 巻、「西洋名物韻箋」2 巻を藩公に奉る。
266		○	1824	文政 7	英国捕鯨船一艘、薩摩封内実島に来り上陸して牛馬の掠奪をなす。島吏吉村九助その一人を射殺す。
267		○	1825	文政 8	阿久根の人宇治に赴き製茶の法を習得し帰る。世に云ふ阿久根茶之なり。
268	○	○	1826	文政 9	3 月 4 日、江戸参府のフォン・シーボルト（Philipp Franz von Siebold）を、島津重豪が奥平昌高、島津斉彬とともに、大森に迎えて会談する。【長】3 月 4 日、島津重豪公、奥平昌高（公の次男）、斉彬公と共に公使に従ひて江戸に来れる「シーボルト」を大森に迎へ、鳥獣の剥製法虫類の貯蔵法を問ひ、後ち又難産治療書の編輯を求め、診察を請ふ等、彼等につき種々の事項を学ぶ。
269	○				4 月 12 日、重豪、長崎へ帰るフォン・シーボルトを品川に送る。
270		○	1826	文政 9	官医堀本好益、1 株の楓樹を薩侯に寄贈す。之を蓬山園中に植ゆるに地に旺んにして盛茂せり。
271	○		1827	文政 10	閏 6 月 26 日、今泉耕作、甲斐国都留郡白野村に生まれる。のち白野夏雲と姓名を改める。『麑海魚譜』編著（1883 参照）

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
272	○	○	1827	文政 10	9 月、島津重豪、高輪の蓬山別墅中に宝庫を増築し、年来の蒐集品を収蔵陳列する。聚珍宝庫と称し、小規模の博物館。 【長】10 月島津重豪公、夙に内外珍奇の物品を収拾して数千百種に至るを以て、聚珍宝庫なる庫を建てて之に収め、曾槃に命じて碑文を書かしむ。又重豪公、嘗つて和漢殊域の衆鳥を賞づ。時折斃死するものあれば、此年より塚を立てて此処に埋葬す。之を〓（マダレにつくりは上に犬、下に土）禽塚と云ふ。
273	○	○	1827	文政 10	連紅県産巴豆渡来し、佐多に植える。 【長】9 月佐多に移植せし福建連紅県産巴豆結実す。阿部櫟斎、其実を曾占春に得て園中に下種し新苗を育し翌年 9 月之を官に上る。
274	○		1828	文政 11	7 月、曾槃、自著『質問草木略』、『中山草木』の両書を本間游清に貸す。このころ出来ていたことの一証左。
275		○	1828	文政 11	曾占春「呂広照薬品問答」及び「質問本草略」を本間清遊に貸す。
276	○	○	1829	文政 12	3 月 21 日、江戸神田佐久間町より出火、燃えひろがった猛火に明石橋の曾槃の家類焼し、歴年の自著、『成形図説』原稿など烏有に帰す。槃この年 73 歳。 【長】3 月、東都柳原より火起り、曾占春が明石橋の家に類焼し、蔵書及び歴年の著述を悉く焼却す。
277		○	1829	文政 12	富山売薬薩摩組合の売薬差止めの令下る。百方運動して禁を解かる。
278		○	1829	文政 12	徳之島、大島、喜界島の出産糖は惣買上とし、若し他に抜売するものあらば死刑に処するの厳法下る。
279		○	1830	天保 1	佐藤信淵、「薩摩経緯記」を著し薩摩の風土物産に関する意見を記し薩摩の国老猪飼央に贈る。
280	○	○	1830	天保 1	重豪の『鳥名便覧』1 巻刊行。 【長】島津重豪公、嘗つて斯方及び殊方の衆鳥を集めて架中に充ちたり。鸛、鶴、鳧、雁の俗は池沼及び蘂 (?) 籠に群をなす。頃間暗記の名称を侍臣に書を作らせ、「鳥名便覧」と名づけ上木せしむ。羽族 415 品を五十音に彙分し和名に附する漢名と蕃名とを以てす。
281		○	1830	天保 1	曾占春、阿部櫟斎が翻刻せし「菊両譜」に序文を草す。
282		○	1830	天保 1	曾占春、薩摩より東都に帰る。其鹿児島を発せんとするや、薬園奉行、向井滄浪以下これを江上楼に餞せり。
283		○	1830	天保 1	琉球よりムラサキオモト輸入す。（※上野版は 1816 のこととする）
284		○	1831	天保 2	1 月蓬山園中に飼養せる丹鶴卵を孵へたり。
285		○	1831	天保 2	6 月曾占春「成形図説」菌部以下 13 冊を続輯し藩主に呈す。
286		○	1832	天保 3	鹿籠と坊之津との魚場の葛藤を生じ、訴訟三年に及ぶ。
287	○	○	1832	天保 3	曾槃、『仰望節録』、『仰望節録附餘』の 2 書を作り、重豪の事跡を書きとどめる。書中、博物学にわたることが多い。この年、重豪 88 歳、槃 75 歳。（※長井版は「『仰望節録』刊行さる」と記す）
288	○		1833	天保 4	1 月 15 日、重豪、江戸高輪邸で病死、年 89。
289	○	○	1834	天保 5	3 月 20 日、曾槃、江戸で歿す、年 77。墓は品川区上大崎 1 丁目常光寺にある。 【長】2 月 11 日曾占春歿す。年 76、江戸深川富吉町正源寺に葬る。占春院弘誉昌適居士と諡せり。（昭和六年市制改革により墓碑は右の寺より芝区白金常光寺に移転す）

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
290	○	○	1837	天保 8	『質問本草』薩摩府学版、内外篇各 4 巻付録 1 巻刊。挿図 160．天明 5 年乙巳に成稿し、例言九則が草せられて以来、50 年が経過した。この版は呉継志子善の著の形になっている。 【長】（1837 年の 9 月以降のこととして）薩藩主祖考の遺志を継ぎ、曾愿に命じ中山呉子善の著せる「質問本草」を校訂し上木せしむ。
291	○	○	1837	天保 8	第 27 代薩摩主島津斉興、磯別邸仙巌園の江南竹林の前に、記念碑を建てる。題して「仙巌別館江南竹記」。撰文は藩の儒者五代秀堯である。 【長】9 月島津斉興公、儒者五代秀堯に命じて、江南竹の由来を不朽に伝へしめんが為、「仙巌別館江南竹記」の石碑を孟宗竹林中に建てしむ。
292		○	1839	天保 10	硫黄島の硫黄採鉱の法を改め、採鉱量増加す。
293		○	1841	天保 12	長崎の人、上野俊之丞を招聘し製薬の法を開く。俊之丞時に「ダケリヤタイプ」といふ写真機を携え来り撮影をなす。是れ我国に於ける写真術の初めなり。
294		○	1843	天保 14	10 月 10 日英国艦八重山に来り上陸測量をなす。
295		○	1843	天保 14	12 月五代秀尭、橋口兼柄等の編輯「三国名勝図絵」全 60 巻成る。各地の物産等も記載さる。此頃種子島のウシウマ 50 頭位あり。
296		○	1844	天保 15	山本荘兵衛藩庁より樟樹並びに諸木植付係を命ぜらる。
297		○	1845	弘化 2	冬、徳之島大飢饉にて餓死するもの多く、為に上納貢糖 2550013 斤の中 1842440 斤より出産なく島民困難を来す。
298		○	1846	弘化 3	4 月 5 日英国船 1 隻琉球に来り、医師其妻子通訳 4 人を留めて去る。
299		○	1846	弘化 3	秋、製薬館を中村騎射場に創立す。
300	○		1846	弘化 3	開聞岳の東麓、岡兒ヶ水の利右衛門（明治後前田利右衛門と追称）の墓畔に、その小頌徳碑を建てる。撰文は山川湊の佐々木広謙、河野通直である。
301		○	1848	嘉永 1	4 月 6 日、徳之島喜念港に米国船 1 隻来る。薪水を求む。日本近海測量に来りしものなりと。其士官とおぼしき者、山野を跋渉して草木を採集せりといふ。4 月 8 日、徳之島亀津に英国船 1 隻来る。日本近海測量の為なり。
302	○		1848	嘉永 1	6 月 6 日、佐藤成裕、号中陵、水戸で歿す、年 87。著書多く、1783 の項に挙げた 2 著の他に、『山海庶品』、『採薬録』、『飼籠鳥』、『中陵漫録』などがあり、他小著が数編ある。
303		○	1843–1848	天保 14–嘉永 1	薩侯の命に依り家老調所広郷菜種の改良を計り、山川、頴娃、知覧、小根占、川辺、加世田を初め各地に之を植えしめ、之に骨粉を用ふる事を創始す。楮を植へ紙の製造法を改良し美濃中国各地を視察し今の伊敷村玉里の紙屋谷に製紙場を設け紙の製造を奨励し又櫨の栽培、蝋の製法改良、桑園を開き養蚕をすすむ。又石炭探索に肥前より山子を傭へり。（※原書では 1844 と 1845 の間に置く）
304		○	1849	嘉永 2	鹿児島尾畔山に諸禽供養塔及び衆鷹塚建立す。
305		○	1849	嘉永 2	島津公、前田杏斎を長崎に遣し、蘭医「モンニツク」に就き、種痘法を伝習せしむ。島津斉彬公牛痘苗を肥前に得て、子儔次郎当才に種痘し好果を得、広く藩内に施行す。
306		○	1849	嘉永 2	山本荘兵衛自費を投じて、川内新田神社境内に樟樹を植付く。
307	○		1850	嘉永 3	3 月、薩摩物頭名越左源太時敏、藩の内訌に連座して奄美大島へ流罪となり、1855（安政 2 年乙卯）6 月まで在留。その間見たことを書き綴る。その中に動植物を写生とともに書きとめることが多い。それらはのちに、『南島雑話』と題して伝えられる。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
308	○		1850	嘉永 3	この年、奄美大島で鼠大発生（名越左源太の記録）。
309	○		1850	嘉永 3	ルリカケス、「産地日本」として初めて学界に紹介される。奄美大島産。
310	○		1851	嘉永 4	島津斉彬、第 28 代薩藩主。
311		○	1851	嘉永 4	6 月、斉彬公、記録所に臨む、文書を閲し後命して弘く史料を蒐集し、家記、物産、風土史等を編纂せしむ。
312		○	1851	嘉永 4	8 月、城内の花園を撤し、薬剤、化学応用諸品の製作所となし、後、開物館と称す。同所に反射炉雛形を造設す。福岡の黒田侯に依頼し、石炭坑に付き経駅あるもの二人を傭ひ、長島、獅子島、甑島、種子島の坑脈を検し、試掘をなさしめ、炭質良好ならず、或は炭層薄くして採鉱の見込なし。依つて水車の利用法を研究せしむ。
313		○	1851	嘉永 4	島津斉彬公騎馬にて谷山に行き、鷹を放ち鶴 3 羽を得たり。
314	○		1851	嘉永 4	奄美大島の鼠の異常増殖やむ。
315		○	1852	嘉永 5	3 月 7 日島津斉彬公吉野にて雉 6 羽、猪、鹿 4 匹を射る。
316		○	1852	嘉永 5	反射炉建設に従事す。
317		○	1852	嘉永 5	8 月、勧農其他条令八章を書して、薩藩士民を諭す。
318		○	1852	嘉永 5	薩人、田原陶猗、肥後之国戎屋戎助を訪問し、聴き得たる人参育種法を一小冊子とし、之に「人参育種」と命名す。
319		○	1853	嘉永 6	此頃、艦船製造に付き後世の為、殖林の必要を感じ、日向国諸県郡高岡郷去川村の山中に大規模の造林に着手す。之薩藩にて船材用として造林をなしたる始めなり。
320		○	1854	安政 1	2 月、薩藩侍医、田宮尚施著「知幾薬言」成る。
321		○	1854	安政 1	3 月谷山の錫山より産出する錫を長崎、大阪、江戸に売りて其価甚高し。ここに於て、島津公其の得る所の千両を宰相公に献ず。
322		○	1854	安政 1	此年より、富山売薬行商人を 26 人に増加するの許可出づ。其後毎年同組合より鉛 150 斤、熊皮 10 枚を薩藩に献ず。
323	○		1855	安政 2	3 月 3 日、ドェーデルライン、ラインランドのベルグツァベルンに生まれる。
324	○		1855	安政 2	4–5 月、アメリカ合衆国の北太平洋探検船ヴィンセンス号他 4 隻、沖縄島から北上し、加計呂麻島、奄美大島、喜界島周辺を調査する。指揮官はロジャース (John Rodgers)、搭乗の動物学者スティンプソン (William Stimpson)、植物学者はライト (Charles Wright)。
325		○	1855	安政 2	米国捕鯨船鹿児島に入港す。
326		○	1855	安政 2	島津斉彬公、藩医数名を長崎に派遣し、和蘭学を修めしめ又長門の青木周鼎、大阪の緒方洪庵に就きて学ばしむ。又戸塚静海、坪井芳洲、川本幸民、石川格太郎を聘し医道及び蘭学を開き、これより医道は一新を見たり。又平素蘭学を斉彬公自ら研究し重要機密の事は往々洋文にて記述せり。蘭学講習所を鹿児島に設置す。尋で西洋通事を置き、緒方洪庵、川本幸民、杉田成郷等をして蘭書を訳せしむ。
327	○		1856	安政 3	8 月 22 日、田代安定、鹿児島に生まれる。
328		○	1856	安政 3	薩藩に製薬座を設け、配置売薬を藩にて取扱ふ事となる。
329		○	1856	安政 3	本邦殖林功労者、山本荘兵衛病歿す。
330	○		1857	安政 4	閏 5 月 7 日、川本幸民、薩摩の藩籍に入る。12 月教授職並。
331		○	1857	安政 4	8 月磯邸内に設けし反射炉、熔鉱炉其他の製作所を集成館と命名す。
332		○	1857	安政 4	常平倉に則り、島津斉彬公、儲穀の方法を著して藩内に分布す。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
333	○		1857	安政 4	12 月 1 日、箕作佳吉、江戸に生まれる。
334		○	1858	安政 5	八木称平、島津斉彬公の命に依り和蘭海軍医官ポンペ、ハン、メールデルホールトの種痘書を訳せし「散花小言」一冊成る。（※ポンペ・ファン・メールデルフォールト Pompe van Meerdervoort）
335	○		1858	安政 5	7 月 16 日、島津斉彬、鹿児島帰国中、急病死行年 50。藩主の地位にあること 7 年半。
336	○	○	1858	安政 5	7 月、田原直助、『宇藩出産考』6 巻と附録を作る。宇和島藩内の植物 270 種および鉱石を記述、動物なし。直助はこの年、鉄砲製造指導のため宇和島藩に滞在していた。 【長】8 月薩人田原明章（陶猗）宇和島藩にありし時、「宇藩出産考」なるものを著す。草部 3 巻、木部 2 巻、鉱石部 1 巻なり。主として草木の主治及び製法を述べ且つ藩内にて採集し得べき地を指示せり。
337	○		1858	安政 5	田原明章（直助）、『草政策硝法』の稿を起す。
338		○	1858	安政 5	田宮尚施著「暴病管見」新刻成る。
339		○	1858	安政 5	薩摩製薬座収支償はず。富山売薬薩摩組合に引渡せり。
340		○	1860	万延 1	富山売薬薩摩組合より昆布 4 千貫を船を以て藩公に献上す。
341		○	1862	文久 2	10 月、磯集成館向江屋敷に鋳銭局を設け、旺んに琉球通宝を製造す。
342		○	1863	文久 3	福山吉野両牧廃止さる。
343		○	1863	文久 3	富山売薬薩摩組合、煙硝 294 メ 220 匁を信州飛騨より買ひ集め薩侯に献上す。
344		○	1864	文久 4	薩藩朝より朴正官に命じて、仏国博覧会に、錦手焼大花瓶を製作出品せしむ。之より薩摩陶器の名海内に響く。
345	○		1865	慶応 1	11 月 29 日、伊藤篤太郎、東京に生まれる。［1941、(昭和 16 辛巳)3 月 21 日歿、年 76］
346		○	1865	慶応 1	比志島野牧廃止さる。
347		○	1865	慶応 1	長崎の英人某、島津家に装蹄、去勢馬を献上す。栗毛洋馬 1 頭なり。
348		○	1866	慶応 2	肥前五島、薩摩より甘藷移植さる。
349		○	1866	慶応 2	7 月、「吉野御薬園地へ草木植付留」と題する記録成る。杜荊 1 本、山茶花 4 本、桂木 21 本、其他薬草木 129 種を記載す。右記録に依れば薬園の広さは 77 間と 41 間の面積を有し二段になり居し如く思考さる。
350	○		1867	慶応 3	田原直助、薩摩藩軍賦役頭取、鉄砲弾薬製造供給の全責任者として、戊辰の役に際し活躍（1868 年参照）。
351	○		1867	慶応 3	下野国足利の求道館、上海版漢訳『植物学』（清、咸豊 8 年、1858 刊）の翻刻版刊行。
352	○		1868	慶応 4 ／ 明治 1	3 月 28 日、神仏混淆の禁止、これに伴う排（ママ）仏毀釈は薩摩で徹底的に実施。
353	○	○	1868	慶応 4 ／ 明治 1	4 月、田原直助が漢訳『植物学』（1867 参照）を和文に抄訳した『植物学抄訳』8 巻成る。刊行は 1875。（※長井版は『植物学抄訳』5 冊とする。）
354	○		1868	慶応 4 ／ 明治 1	7 月 17 日、江戸を東京と改称。
355	○		1868	慶応 4 ／ 明治 1	9 月 8 日、明治と改元。
356		○	1868	慶応 4 ／ 明治 1	種子島のウシウマ 60 頭に達す。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
357		○	1868	慶応 4 ／明治 1	長島野牧廃止さる。
358		○	1870	明治 3	大島、徳之島地方天然痘流行し徳之島は男女 2000 余人死亡す。
359	○		1871	明治 4	7 月、廃藩置県。
360		○	1871	明治 4	廃藩と共に吉野、山川、佐多御薬園取止めとなる。
361		○	1871	明治 4	鹿児島県発行「博物新編」3 冊出版さる。
362	○		1872	明治 5	11 月 9 日、太陽暦を採用。
363		○	1872	明治 5	種子島、芦屋野牧廃止に当り、ウシウマは島中の貧民に給与さる。（現在本獣は天然記念物に指定せられ種子島に 12 頭、東京上野動物園に 1 頭あり）。
364	○		1873	明治 6	田原直助、軍事視察のため欧州へ出張、英京で英語の学修に植物学書を用いる。
365		○	1873	明治 6	種子島西の表の人、西村守人、武田龍蔵の両人試みに種子島の牛 3 頭を馬毛島に放牧し成績佳良なり。
366		○	1873	明治 6	大島、徳之島、喜界島、沖永良部島、与論島出産糖惣買上げ廃止せらる。
367	○		1874	明治 7	田代安定、東上して博物局に入り、田中芳男に就いて植物学を学ぶ。
368	○		1875	明治 8	田原直助の『植物学抄訳』刊。原本の漢訳『植物学』は、英人リンドレーの『植物学要綱』を韋廉臣が訳し李善蘭が筆述したものである。
369		○	1874–1875	明治 7、8	鹿児島の農事社長知識兼雄、和蘭豚牡 2 頭を輸入す。
370	○		1877	明治 10	4 月 12 日、東京大学開学、理学部に生物学科を設ける。教授は植物学矢田部良吉、動物学者米人モース（Edward S. Morse）、9 月開講。
371	○		1858	安政 5	この年、田代安定、『紀州採薬記』を作る。
372	○		1879	明治 12	5 月、東京大学お雇い教師、アメリカ人動物学者エドワード・モース、鹿児島湾の海底および海岸の動物を採集する。
373	○		1879	明治 12	陰暦 6 月、田代安定、鹿児島湾の喜入海岸でメヒルギの大群落を発見する。
374	○		1879	明治 12	11 月 12 日、ドイツ人ルートヴィヒ・ドェーデルライン（Ludwig Döderlein）、東京大学お雇い教師、医学部で動植物学を講ず。
375	○		1880	明治 13	5 月、田代安定帰薩、鹿児島県庁に勤務。
376	○	○	1880	明治 13	8 月、ドェーデルライン、高松数馬を伴い、主として魚類採集のため奄美大島へ渡る。田代安定、鹿児島より同行。15 日、名瀬上陸、湯湾岳登山後、加計呂麻島の瀬武を根拠地として海産動物を採集、8 月 31 日名瀬出航、鹿児島を経て 9 月 9 日東京に帰着。 【長】独逸の学者、ドクトル、デーテルライン［魚類専門家］8 月鹿児島県下大島に赴き、16 日間逗留し、動植物探究に従事す。此時、鹿児島の人田代安定常に同行し、嚮導の任に当れり。当時の状況は Ueber die Flora der Luikiu Inseln といへるデイ氏の論文に詳細なり。
377	○	○	1881	明治 14	2 月、青江秀編著の『薩隅煙草録』を鹿児島県が刊。
378		○	1881	明治 14	明治大帝、四の橋の薩侯の別邸に臨幸、島津家に伝ふる犬追物を天覧あり。終つて袖ヶ崎邸に蹴鞠を天覧あり。
379	○		1881	明治 14	12 月 21 日、ドェーデルライン契約満期により帰国す。この年 “Amami-Oshima” の 1 文を発表し、動物分布上、旧北区と東洋区との境界は、奄美大島と九州南方の種子、屋久両島との間にあるべきことを示唆する。
380	○		1882	明治 15	田代安定、農商務省の命により、キナノキ移植のため沖縄島に渡る。

	上野	長井	西暦	和暦	事　項
381	○		1882	明治 15	12 月、箕作佳吉、東京大学教授、動物学担任、26 歳。
382	○	○	1883	明治 16	鹿児島県、彩色魚貝図『麑海魚譜』を作る。作者は県職員白野夏雲、描画者は木脇啓四郎、二木直喜。この年東京市上野公園で開催の水産博覧会出品のため。別に同じ魚貝図を銅版に製した上下 2 巻本を刊行する。 【長】鹿児島県編輯「麑海魚譜」成る。明治十六年の水産博覧会の為、白野夏雲が出品の料として編纂を命ぜられたるものにして、2 冊よりなり 325 種記載さる。
383		○	1883	明治 16	5 月政府は馬毛島の羊の試牧を廃し、全部牧羊舎に払下ぐ。
384	○		1883	明治 16	田代安定著『鹿児島県草木誌内篇』成る。
385	○		1884	明治 17	2 月、田代安定、ロシアへ出張を命ぜられ、聖ペテルブルグで開催の植物学園芸学国際会議出席する。終了後、露都に滞在し、植物学者マクシモヴィッチ（Carl Maximowicz）の許で、植物を研修、この年の末に帰日。
386	○		1884	明治 17	伊藤篤太郎、英国ケンブリッジ大学入学、ヴァインス（S. H. Vines）とフランシス・ダーウィン（Francis Darwin）に就いて植物生理学を、ロンドンのキュー植物園で、フッカー（J. D. Hooker）に就いて植物分類学を修める。
387	○		1884	明治 17	東京大学お雇教師、地質学者、ドイツ人ブラウンス（David Brauns）、哺乳類により、旧北、東洋両動物区の境界を、種子屋久両島と奄美大島との間におくべきことを提唱する。
388		○	1885	明治 18	川端梓著「養蚕手引草」出版さる。
389	○		1889	明治 22	伊藤篤太郎帰日。
390	○		1894	明治 27	3 月、伊藤篤太郎、鹿児島高等中学校造士館教授、1896 年 9 月まで在任、その間琉球植物を研究する。
391	○		1896	明治 29	3 月 29 日、帝国大学教授箕作佳吉、原十太を伴い鹿児島着、4 月にかけて鹿児島湾を中心として、海産動物を採集する。
392	○		1896	明治 29	12 月 21 日、田原陶猗（直助）鹿児島で歿す、年 84。
393	○		1896	明治 29	アマミノクロウサギ捕獲（最初の標本）。
394	○		1897	明治 30	2 月、田代安定、台湾総督府技師、熱帯有用植物の調査研究に従事［1928（昭和 3 年 3 月 16 日）鹿児島滞在中歿、年 73］
395	○		1899	明治 32	2 月 23 日、木脇啓四郎、鹿児島で歿、年 85。『麑海魚譜』の描画家の 1 人。（1817 参照）
396	○		1899	明治 32	9 月 8 日、白野夏雲、札幌で歿、年 73。1890（明治 23）以来、札幌神社宮司。鹿児島県在職時代、『麑海魚譜』の編纂に従事（1883 参照）。
397	○		1900	明治 33	ストーン（W. Stone）、アマミノクロウサギに学名を与える。
398	○		1901	明治 34	［3-4 月、箕作佳吉、奄美大島へ渡り海産動物を採集。3 月 25 日名瀬に上陸、加計呂麻島との間の瀬戸で採集に従事、のち沖縄島に航し、4 月 23 日鹿児島に帰着。］

参考文献

上野益三（1982）『薩摩博物学史』島津出版会。

岡田雅志・柳澤雅之編（2020）『CIRAS Discussion Paper 97　アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究──シナモンがつなぐベトナムと日本──』京都大学東南アジア地域研究研究所。

鹿児島市編（1935）『薩藩の文化』鹿児島市教育会。

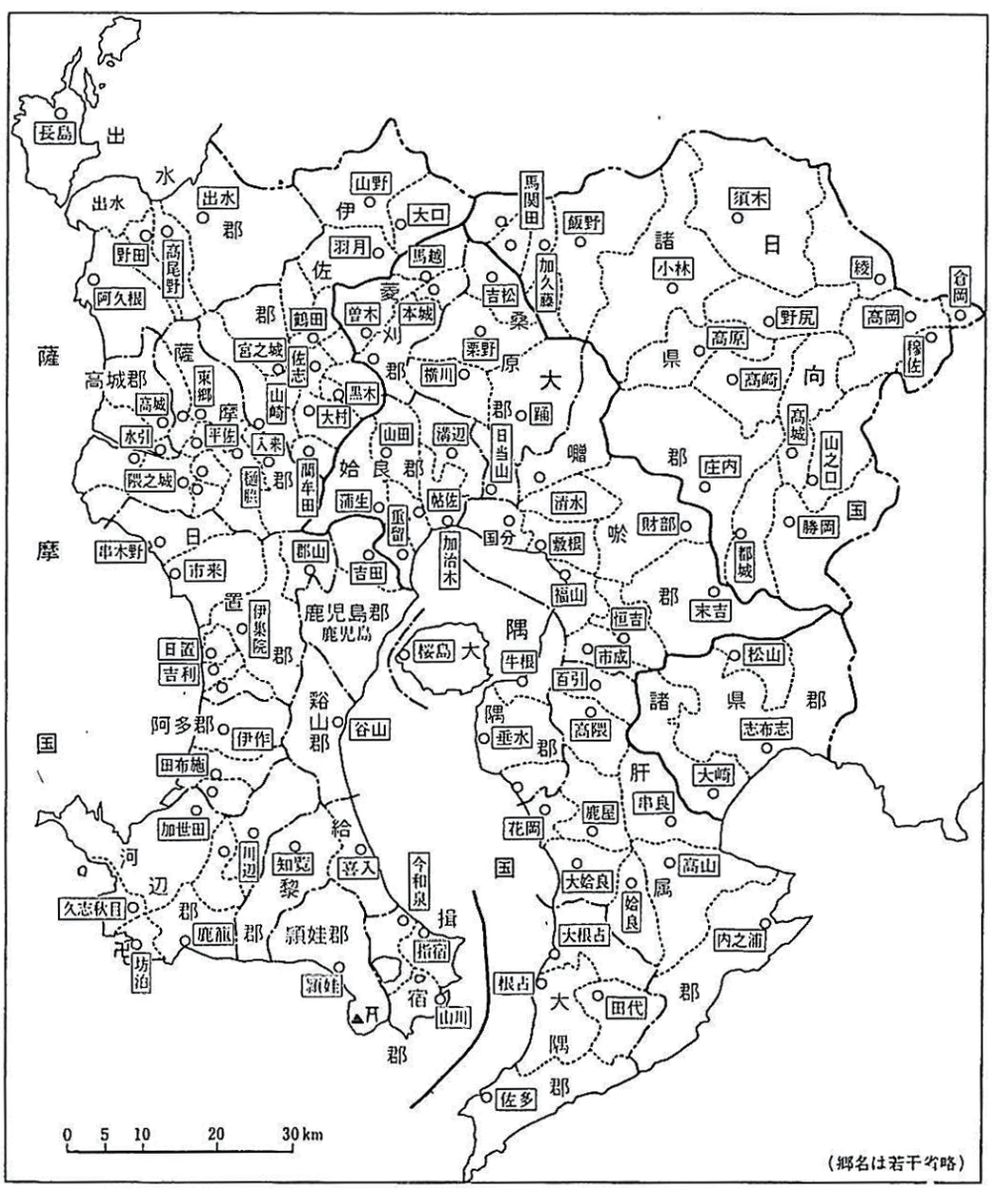
鹿児島市史編さん委員会編（1969）『鹿児島市史 第１巻』鹿児島市。

末永一（1955）「故岡島銀次先生を憶う」『昆蟲』23(2)、pp. 43-44。

高津孝（2017）『江戸の博物学：島津重豪と南西諸島の本草学』平凡社。

長井實孝編（1934）「薩摩藩博物学年表」鹿児島高等農林學校，鹿児島高等農林學校創立廿五周年記念會編『鹿児島高等農林學校開校廿五周年記念論文集』鹿児島高等農林學校：鹿児島高等農林學校創立廿五周年記念會。

内藤喬編（1937）『薩藩の薬園と本草学』手稿本。



江戸時代郡郷図（熊毛・馭謨・甑島の三郡と大島を除く）
（出典）芳即正『人物叢書 191 調所広郷』吉川弘文館、1987 年、89 頁

著者紹介

石橋弘之

早稲田大学人間科学学術院助教。専門・関心は人と森との関わりをテーマとした地域研究。主な著書に「カンボジア西部カルダモン産地の地域史にみる「禁忌の森」の伐採と焼畑休閑地の権利」(『東南アジア研究』59 巻 1 号、2021 年)、『流域ガバナンス――地域の「しあわせ」と流域の「健全性」』(分担執筆、京都大学学術出版会、2020 年)など。

遠藤正之

立教大学アジア地域研究所特任研究員。専門・関心は近世東南アジア史、近世カンボジア史。おもな業績として「カンボジア王ラーマーディパティ 1 世(在位 1642 ～ 58)のイスラーム改宗とマレー人の交易活動――オランダ東インド会社との関係をとおして」(『東南アジア　歴史と文化』39 号、2010 年)、「カンボジア・オランダ東インド会社間通商平和条約締結(1656 ～ 57 年)――カンボジア王権とオランダ東インド会社の交易独占の試みをめぐって」(『史苑』第 74 巻第 1 号、2014 年)など。

岡田雅志

防衛大学校人間文化学科准教授。専門・関心は東南アジア山地世界史、森林資源の流通と利用の歴史。主な著書に、『越境するアイデンティティ　黒タイの移住の記憶をめぐって』(風響社、2014 年)、『「大分岐」を超えて　アジアからみた 19 世紀論再考』(分担執筆、ミネルヴァ書房、2018 年)など。

柳澤雅之

京都大学東南アジア地域研究研究所准教授。専門・関心は東南アジアの生態史、ベトナム農村発展史、地域情報学。主な著書に、『No life, No forest 熱帯林の「価値命題」を暮らしから問う』(京都大学学術出版会、2021 年)、『景観から風土と文化を読み解く』(京都大学学術出版会、2019 年)など。

表紙写真

左上　カンボジアとラオスを分ける境界となるコーンの滝(撮影：遠藤正之)
右上　甲賀修験の霊山、飯道山の歩道に沿って流れる「拳骨の滝」(撮影：石橋弘之)
中　飯道山の麓にある飯道寺。明治 25 年の廃仏毀釈により廃寺となったのち、山上の寺から法灯を引き継ぐ(撮影：石橋弘之)
右下　鹿児島県伊佐薬草の杜(撮影：柳澤雅之、2020 年)
左下　1779 年創設の吉野薬園跡に立てられた石碑(鹿児島市内吉野小学校敷地内、立碑は 1932 年。撮影：岡田雅志)
背景　マレー人有力者インチェ・アッサムの名がみえる VOC 文書(撮影：遠藤正之)

CIRAS Discussion Paper No. 112
アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究（III）
――地域社会の経済・文化資源として――

編　　者　　岡田雅志
　　柳澤雅之

発　行　日　　2022年3月31日

制作・発行　　京都大学東南アジア地域研究研究所
　　https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp

印　　刷　　株式会社田中プリント
　　〒600-8047　京都府京都市下京区石不動之町677-2
　　https://www.tn-p.co.jp